
魔法先生ネギま！ ～転生者の奇妙な物語～

赤原 鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～転生者の奇妙な物語～

【Nコード】

N1977R

【作者名】

赤原 鴉

【あらすじ】

死んだ少年。神様と邂逅。転生。能力ゲット。テンプレート街道をまっしぐらに突き進む感じ。『魔法先生ネギま！』の世界で、神様から賜った能力をフルに使い、第二の人生を謳歌していく……んじゃないかなあみたいな。そんなお話。この作品は一応『魔法先生ネギま！ ～天使で死神な物語～』とリンクしていません。こちらも読めば楽しさが増すかもです。多分増しませんごめんなさい。読んで下されば幸いです。

第1話「神は言っている」(前書き)

時止めれるとか最強だと思っんだがどうだろうか。

第1話「神は言っている」

少しばかり俺の話に耳を傾けて欲しい。いや何、単なる例え話さ。そう、例えばの話。

目が覚めると、そこは見知らぬ部屋で。神を自称する優男にエンカウトして。

その優男に、自分が既に死んでいる等と宣われりしたとして。貴方なら一体、どんな反応を示す？

因みに言うと、これは例え話でも何でも無い、俺の現状であるが、まあ聞いてくれよ。リアルタイム随想とでも思ってたさ。

俺の示した反応は、これでもかってくらいに怪訝な眼差しを優男に注ぐ事だった。優男は顔面に胡散臭い笑みを貼り付けて軽く流しやがったが。

「そう訝しげな表情をしないで下さい」

優男は静かにそう言う。いや、普通に当然の反応だと俺は思うぜ。大多数の日本人なら分かってくれるだろうと思うが、初対面の男に神様発言をかまされたら、そりゃあ怪訝に思うだろう？

大体にしてこの優男、見た目から神様っぽさゼロである。

よれよれのシャツの上にくたびれた白衣を羽織り、皺だらけのズボンとボロボロの靴を履いている神様が、果たして存在するだろうか。無意味にイケメンなのがまた服装とミスマッチして神様らしからぬ雰囲気醸し出していた。

「あー……失礼ですが、神様ってのは冗談で？」

冗談だとしても、ユーモアはカケラも無い。そう思いながらも、一応敬語を保って訊いてみる。

「まさか、冗談で神だなんて言いませんよ」

そう言ってくつつと笑う。

「ああ、成る程、信じてないんですね」

当たり前だ、と口の中で呟きながら、首肯する。

「ふむ……では、そうですね。適当に誰かの姿を思い浮かべてみて下さい。誰でも構いません」

唐突に何だつてんだ。

「私はその姿になります」

それは結構衝撃的な発言だった。

詰まるところこの優男は「別人になる」と宣言したのだ。整形も無しで。しかも俺が思い浮かべた姿に。

成る程、これで姿が変わったなら神様と認めざるを得ない。よな？ うん、多分。きつと。

「なら……」

物は試し。言われた通りにやってみる事に。

取り敢えず性別を変えてみよう。そして外見も今とは逆に幼くして。よし、ツインテールの似合うロリっ子にしよう。

別にロリが俺の嗜好という訳ではないぞ、ないからな、ないんだよ。

俺がその姿を頭に描いた途端、優男は奇怪な、形容し難い効果音を伴ってその姿を変貌させた。

「……おお」

俺の目の前には、既に優男は居ない。代わりに、白衣を纏った少女が佇んでいた。

「……ふう。これで、私が神だという事、信じてくれますか？」

「貴女は紛う事無き神様です」

俺は絵に描いた様なロリっ子の言葉を全面的に信じる事を、今、この瞬間誓った。

俺は死んだらしい。これは冒頭でも言われた事だったが、何と死に際の映像を見せられた。映像には僅かに俺の頭に残る記憶と符号する点が山程あり、要するに俺は自身の死を疑う余地を完全に潰された形となった訳だ。選択肢は『死を受け入れる』一択である。

俺の死に様は随分と滑稽だったので描写を避けるが、とにかくにも、死んだのだった。

今の俺は魂だけの存在という話だ。

死んだ自分。神様。となると此処はさしずめ死後の世界ってところなのだろう。うーむ、清々しい程に日常から乖離しているな。死んだ時点で日常もクソも無いだとか、そんな事は言っちゃいけません。

「あの」と俺。

取り敢えず、死んだ事と目の前の少女が神様ってのは理解した。しかしまあ、気になる事がある。俺の、今後の処遇についてだ。

天国だか地獄だか知らんが、何処ぞへとドナドナよろしく輸送されてしまうんじゃないかと思うとぞつとしない。ああ、我ながら嫌な未来想像図だぜちくせう。

「俺はこれからどうなるんでしょう」

「どうなると思います？」

質問に質問で返すとは、いい度胸してやがる。何様だテメー。神様か。

「本来なら、ですね。貴方の様な死者の相手をするのは、部下の天使達なんですよ」

優男から少女に容姿が変わってもなお、胡散臭い笑みを湛えて説明する。

それにしても、天使ねえ。比喻じゃなくてガチなんだろうな。羽とか生えてんのかね、見てみたいものだ。

「天使達は此処から少し離れた場所で働いていまして、死者の魂は全てそちらに向かう手筈なのですが……」

「何故か神様の下にやって来た？」

「そうですね、その通りです。貴方は何故だかこちらに来てしまった。それは則ち、正式な処理が行われないという事です。まあ、私が一声掛ければ貴方を天使達の作業ラインに乗せる事は容易いですが……」

何故か妙に溜める。

そして、僅かに先程までとは質の異なる笑みを浮かべた。

「それは止めておきましょう」

「……はい？」

「ですから、貴方の身柄を天使達に引き渡すのは止めておきましょうって言うてるんですよ」

いや待て、いきなり何を言い出すんだこの人……ってか神様は今自分で「作業ラインに乗せる事は容易い」って言ったのに、何故に止める。怠いのか？ 職務怠慢なのか？

「疑問符を派手に飛ばしてますね。ああ、ちゃんと理由はありますよ、勿論。無い訳が無いじゃないですか」

どーだか。

「最近の天使は働き過ぎでしてね、人間だったら過労死しててもおかしくないくらいせつせと仕事に励むんですよ。いや、天使はそんな事じゃ死にませんし、仕事に励む事は良い事ですがね。何と言いますか……その……」

神様は少女さながらに頬を染め、もじもじとし始めた。そして……、

「暇……何ですよ、天使が頑張ると」

頬を染めてもじもじする必要があつたのかどうか、問い詰めたい、小一時間程問い詰めたい。

要するに、天使頑張る↓神様まで仕事が回らない↓暇暇アアアッ！ という事らしい。天使は神様の仕事まで片付けてしまっている模様。そりゃ、確かに暇かもしれないが。

「その事と俺の事、一体何の関係があるってんですか」

「分からないですか？」

「分からないですね。」

「貴方には私の暇潰しに付き合って貰おうかな、と思ひましてね」

……何ですと？

「具体的には、アレです、転生って奴ですよ。ほら、二次創作とかで有りがちなアレ。分かります？」

「いや、分かりますけど……どうして神様が二次創作とか知ってるんですか」

「暇ですから」

何でも有りかあんだ。

「私二次創作の転生モノが大好きでして。一度やってみたかったんですけど、死者の魂は管理統制されていて出来ないんですよ。でも諦めきれなくて、どうにか実行してやろうと画策してたところに」

「……俺が来た？」

「Exactly（その通りでございます）」

とんでもない神様である。

要するにこれはアレか、テンプレ展開という奴か。神様から直々に能力を賜り、漫画やアニメの世界に行く、よくあるアレなのか。

何だこの超展開。

「当然、能力は付加しますよ。漫画やアニメのあんな力こんな力を使える様になって、更にもう一度人生を歩める……悪い話ではないでしょう？」

確かに魅力的だ。享年十七歳で満足は出来ないし、超常的な力が使用可能とあつては、俺に断る理由は無い。そういう能力的なのに

は、やっぱり憧れがあるんだよ、男の子だからなアアアッ！

神様は神様で、俺を暇潰しに利用するらしいし。所謂ギブアンドテイクと言えるだろう。

「で、どうします？ この話を『受ける』か『受けない』か」

こちらにマイナスな条件がある訳じゃない、だったら、答えは一つしかない。

「この話、受けますよ。神様」

「グッド！ そうこなくちゃ！」

それにしてもこの神様、ノリノリである。最初と随分キャラが変わってきている気がするが、うん、気の所為にしておこうかなッ！
「それじゃー早速準備を始めちゃいましょう！ うはぁーワクワクが止まりませんねエー」

……気の所為つてのは無理がありそうだなッ！

神様のキャラ崩壊——いや、寧ろ本性を表したと言うべきか、凄まじい豹変ぶりに半ば圧倒されながらも、転生の準備とやらは着々と進行していった。

俺は何もしてないけど。

まさに神懸かった速度で俺にはよく分からない作業をこなす神様。その様子は、仕事が無い事で蓄積した欲求を晴らしている様に見えるたりして。何処のワーカーホリックだ。実際そうなのかは知らんが。

神様が何だか頑張っているのを余所に、手持ち無沙汰な俺は神様の部屋の隅で邪魔にならない様に立ち尽くしていた。

それにしても、だ。

こんなにテンプレートな非現実のただ中に、まさか自分が飛び込むとは思っても掛けなかった。事実は小説より奇なりってか。

成人する前に死んだのも充分思い掛けないが、此処——神様の居る部屋に来てからの一連の出来事のお陰で死んだショックがかなり薄いのは、ある意味不幸中の幸いと言うか、何と言うか。

俺の順応力が高いのかもしれないが、はてさて。

「あつ、あーあー、忘れてました」

何やら作業中の神様が声を上げる。何を忘れてたのだろう。

「能力、貴方に付加する能力の事ですよ！」

「ああ……能力ですか」

そういえば、その事については何一つ話してはいなかった。俺が望む能力を寄越してくれるのか？

「これは転生モノには欠かせない要素だと私は思ってたりするんですよね。あんまりチート過ぎるとアレですけど、まあそれも転生モノの醍醐味と言いますか——」

ええい、語るな語るな。

「コホン、まあ、それはそれとして。で、どうします？　YOUはどんな能力が欲しいんDAI？」

「どうしたんですかマジで」

神様は何かがおかしかった。頭の中枢ら辺のネジが三本くらいぶっ飛んだんじゃないか、優男から少女への変身の際に。

まあ、第一印象が変な奴だったのでさしたる変化は無いか。そんな事より今は能力とやらの事だ。

「質問があります」

「はい、何でしょう」

「その能力つてのは、チート過ぎてもいいんですか？」

「うーん……さあ、どうでしょう」

どうでしょう、って何さ。

「あんまりチート全開だと面白くないんで、私がその能力を『チート過ぎんだろ、おい』と判断した場合はダメって事にしましょうか」
アンタのさじ加減って事ね。

「そついう事ですネ」

「ナチュラルにモノローグを読まないで下さい」
度し難いな、この神様。

あー……。

能力。能力ね。

普段は『こんな能力使いりゃいいな』だの考えたりするのに、こ

ういう状況になると随分と悩んでしまふ。しかしなあ、いつまでも悩んでても仕方ない訳で。

「早くして下さいよ」

急かさないでくれ。

……ああ、そうだ。最近ハマってた漫画から引つ張ってこよう。もう、そうしよう。その方が楽だ。

「……よし、決めた」

「おや、決まりましたか？」

「はい、決まりました」

『ジョジョの奇妙な冒険』——それが、俺のハマってた漫画である。バトル漫画のこの作品から、俺はあるボスキャラの能力をセレクトした。ジョジョを知る人ならば、この時点でそれなりにどの能力かを絞る事が出来ると思う。

「じゃあ——」

「ちよつと待ったッ！」

と、神様は、俺が能力の名を告げるよりも数瞬早く、突如声を張り上げた。ええっと……、

「何ですか？」

「いやあ、あらかじめ釘を刺しておきますけど、無限の剣製とか、そういうのは却下ですからね」

何故？

「在り来りでツマライナイから、理由はこれに尽きます」

さようでございますか。

そうだった、俺の転生はこの度し難い神様の暇潰しも兼ねているんだった。

俺のチヨイスした能力は無限の剣製では無いが、ツマライナイなどと突っぱねられないか不安だ。

「さて、さてさて。すみませんね、遮っちゃって。さあどうぞ、貴方が望む能力、言っちゃって下さい」

ようやくだった。

一呼吸置き、口を開く。

「スタンド『世界』……それが俺の望む能力です」

「『世界』……」

前述の『ジョジョの奇妙な冒険』はこのスタンドと呼ばれるモノを駆使して各々が戦闘を行う。まあ、スタンド登場は第三部からだったりするんだが。さておき。

スタンドってのは超能力が具現化したモノと捉えて貰って構わない。

様々な形状が存在するが、俺の望んだ『世界』は人型である。

パワー、スピード、精密動作性……そういったモノが他のスタンドに比べ飛び抜けて高い。が、真に恐ろしいのは『世界』に備わる能力だ。

「はっはぁー、時止め、ですか……」

そう、時止め。

『世界』は時間停止能力を備えているのだ！ 落下していく物体は宙に止まるし、生物の動きも意識も、自分以外の全ての動きが止まる。静止した時の中で自由に行動が出来るのは自分だけ、という訳だ。

「で？」と神様。

「『世界』だけでいいんですか？」

「……え？」

「え？」

何をおっしゃってんですか。アンタ。

「能力は一つだけなんじゃ……？」

「いつ、誰がそんな事言いましたか。別に二つでも三つでも構いませんよ」

「な……」

なんだってー！？

確かに、神様は付加能力を一つだなんて言ってなかったけども。二つ三つも能力付けていいのだろうか。

「いいんですよ」

だからモノローグを読むなどってんでしょーが。怒りますよオジサン。

「後一つ二つ無いと不安ですし」

か細い声でボソツと呟く神様。聞こえてますがな。……俺はどんな所に転生させられるんだ。怖い。

「取り敢えず一つ目、『世界』ですね。はい、二つ目どうぞ」

こちらの意思は無視の模様。

二つ目……二つ目。んなもん全く考えてなかった。パツと思い付いた奴でいいか。

「あー……じゃあ、そうだ、波紋。波紋技術を下さい」

波紋——これも『ジヨジヨの奇妙な冒険』にて使用された技である。

特殊な呼吸法により血液中のエネルギーを蓄積し、生命エネルギーを活性化させる。それが波紋だ。若さを保てたり、敵にぶつけてピリツとさせたり、水面に立てたりと、汎用的な能力である。

「波紋……ですか、いいでしょう」

神様は思案顔のまま頷く。

「後は……そうだな……『メタリカ』……ああ、『メタリカ』にしようかな」

「おや、『メタリカ』とききましたか。リゾット格好いいですよね」
ジヨジヨは確実に読破してやがるぜ、このロリっ子。俺はリゾットよりギアツチョ派です。いや、そんな事はどうでもいいんだ。

『メタリカ』は『世界』と同じくスタンドであるが、人型ではなく蛆虫さながらな姿をしている小さな群隊のスタンドで、能力者の体内に潜んでいる。備わっている能力は、磁力により鉄分を操作するというもの。それにより刃物を作り出す事が可能で、更には砂鉄を身に纏う事により風景に溶け込むなんて事も出来てしまうスグレモノである。

俺の魂胆としては、『メタリカ』でナイフを生成し、『世界』で

時を止め、生成したナイフで攻撃！　とかそんな感じ。

波紋は、アレだ、時を止めた事による僅かな老化を波紋で防ごうかな、とか思ってる。静止した時の中を動けるという事は、時を止めた時間分だけ老化するって事なんだし。

我ながらナイスな組み合わせだ。異論は認めない絶対認めない。

というか、ジョジョ尽くしだな、俺。

「もう欲しい能力はありませんか？」

「ありません」

これだけありや充分だと思うのでせうが。

「ふむむ……」

微妙に不満げな表情の神様はかぶりを振り、此処にきて初めて凛々しい顔付きになった。

「では、これよりこの能力を付加して貴方を転生させます」

スツ、と腕を上げる。

「私が指を鳴らせば貴方の転生は完了します。恐らく、意識が戻った時、貴方の新たな肉体は二歳程でしょう」

「二歳……？　赤ん坊から、とかじゃないんですか？」

「いや、恥ずかしいでしょう。排便の処理を他人に行われたりするの。その辺を考慮した結果です」

そりゃ……有り難い。

「さて……覚悟はいいか？　私は出来てる」

「何と言うブチャラテイ」

神様の指に力が籠る。

もうすぐ転生。このロリ神様とお別れか。

現実味が偉く欠如している稀有な出来事に遭ってしまったが、これが俺の荒唐無稽な夢だったら泣ける。

まあ、そんな事は無いだろうと根拠も無く思う。

「では、お別れです」

凛々しい顔付きは何処へやら、最初の胡散臭い笑みを貼付けて、神様は言う。

「第二の人生、せいぜい謳歌して下さい」

「神様も、暇潰しをせいぜい頑張ってください」

互いに口角を吊り上げ、そして、

パチンツ、と。

小気味良い音が辺りに響いたところで。

俺は意識を失——

「あ、そうそう。貴方の転生先は『魔法先生ネギま!』の世界です
んで」

——な、なんだってー!?

最後に飛んで来た思わぬ情報に耳を疑いながら、今度こそ俺は意識を手放すのだった。

第2話「ロリ神様の言う通り」（前書き）

ああ、こんだけ書くのに時間掛かり過ぎだよなあ。

という訳で二話目でございます。原作キャラはまだ出てきません。

早く原作に絡めたいな。

第2話「ロリ神様の言う通り」

子供部屋であろう場所に一人ぼつねんと座るのは、転生を終えた俺だ。体は二歳児のそれになっている。

神様のお告げ通りだ。

覚醒したての俺は辺りを見回し、視覚情報から状況を把握しようとした。

「ふむ……」

分かった事は、この部屋がやたらファンシーである事だけだった。ああ、ファンシー過ぎて目に痛い。

壁にはべたべたとデフォルメされた動物達が貼られていて、つぶらな瞳でこちらを見詰めてくる。なにこれ怖い。

それだけじゃない、動物達は平面だけでなく立体としても部屋を席卷している。要するにぬいぐるみだ。熊とか犬とか猫とか。多種類の綿製動物が鎮座しているのだ。

その所為もあってか、この部屋は圧迫感が尋常ではなかった。何処の圧迫祭だ。

そんな部屋の隅にあるベッドに座って、尚も俺はキョロキョロと首を巡らせる。

と、何かを発見した。

「……なんだ、これ」

幼さを感じさせる声で呟く。

俺の視線の先——ベッドの上に、手紙の様なモノがあった。というか手紙だ。誰宛てだろうか。

まじまじと見てみると、隅の方に何やら文字を発見。何々。

『ディオ・ブランドー殿』

吸血鬼宛ての手紙かこれは。

差出人の名前は何処にも書かれていなかった。

マジで吸血鬼宛でだったりして。それはそれで、どうしてこの手紙が此処にあるんだってなるんだけれど。

さておき。

……こんな某超能力漫画に登場する黄色い吸血鬼そのまんまな名前の宛てに送られた手紙が、気にならない訳がなく。

俺は好奇心と探求心に後押しされ、ビリビリと封を剥がし、内容を確認する事にした。

以下、手紙の内容である。

『ディオ・ブランドー殿。

前略。

どうもこんにちは、こんばんは、もしかするとおはようございます。愛しの神様ですよ。

貴方がこれを読んでも、恐らく私は睡魔にやられているだろうと思われます。神様だって眠いもんは眠いですよ。

さてさて、私がこうしてわざわざ文をしたためた理由としましては、貴方への状況説明と言ったところです。

順に書き綴っていきましょう。

先ずは貴方の事。姿形は、当然ですが以前の、元の貴方と同じではありません。一応、転生なので。名前だって違いますよ。

ディオ・ブランドー。それが貴方の新しい名前です。黄色い吸血

鬼をリスペクトしてみましたよ。

能力がアレですし、別にいいですよ。異論は認めません。

外見については後で鏡でも覗き込んで下さい。べ、別に説明が面倒臭い訳じゃないですからねッ！

因みに、貴方の外見は日本人のモノではありませんが、安心して下さい、そこは日本です。

続いて、貴方の家庭環境ですが、父親は居ません。母親が女手一つで貴方の世話をしている状況です。因みに美人ですよ、お母さん。良かったですね

もう最後でいつか。最後に能力についてですけど、これはバッチリ貴方に与えましたんでご心配なさらず。使用に関しましては、もうノリと勢いで頑張って練習してみてください。時を止めて女の子にえっちい事をしちゃダメですよ？ 私見てますからね？

では、第二の人生を有意義に過ごして下さい。

かしこ

神

——神様から俺宛てでしたとさ。

まさか手紙でこんな説明してくると思いきもなかった。流石神様、俺達に出来ない事を平然とやってのける、そこに痺れ……ないし憧れないけどさ。

最後の説明とか『もう最後でいつか』って書いてるし。書くな。
やる気無いだろ。いや、眠かったのか？ 睡魔による絨毯爆撃に遭
っていたのか？

……まあ、いい。

ともかく分かった事は、今の俺には母しか居ない事。そして名前
がディオ・ブランドーである事。

ディオ・ブランドー……ねえ。

元の名前に愛着が無い、と言えば嘘になる。十七年もその名で過
ごしたのだから当然かもしれないが、かと言って固執する程でもな
い。けど、なあ。

まさか日本人じゃなくなるとは、軽く驚愕と言つか、何と言つか。
……で、後はアレか。能力に関して。

ノリと勢いで頑張って……か。ノリと勢いだけじゃどうしようも
ないと思うのは俺だけだろうか。

神様の感性つてのは凡庸な人間である俺にはイマイチ理解し難か
った。

ともかく、神様が丁寧に手紙を寄越して状況説明してくれたお
陰で、ある程度は慌てなくても済むだろう。

よくよく考えてみればろくに何も分かってないが、気にはしまい
アフターケアがなっていないぞ、と神様に文句の一つでもぶちまけ
てやりたい気分だが、文面通りなら今頃ねんねしてるんだろ。口
り神様になってから元々無かった神様らしさが更に欠如していつて
る気がする。マイナスどころの騒ぎではない。

さておき。

俺が今しなくてはならないのは、やはり色々と把握する事だろう。
色々というのは、とにかく色々だ。

まあ何をするにも、先ずはこのデフォルメアニマル率の高い部屋
から脱出しなくてはならないと思う。俺の人生にこんな量のぬいぐ
るみは要らない。

よろよろと立ち上がる。

二歳児の体は想像以上に動かし辛かった。が、歩けない訳ではない。そのうち慣れるだろう。

何となく覚束ない足取りで部屋の出入口を目指す。

そうして、やっとこ扉までの道程を踏破し、俺が地味な達成感に浸っていると、ガチャリと音を立てて扉が開いた。俺はまだ触れていない。

開かれた扉の先には、金髪の美人さんが立っていた。

ピンと来たね。恐らくはこの人が俺——ディオ・ブランドーの母親なんだろう。

「うん？ 何だ、起きてたのか、ディオ」

金髪さんが口を開く。ゆったりとした服に身を包み、ジーンズを履くその姿は、とても子持ちとは思えない。

ふわり、とブロンドの髪が揺れた。

「一人で起きたのか、偉いぞ」

そう笑って俺の頭を撫でてくる。

微笑んだ顔で、わしわしと。

非常にこそばゆい。

「くすぐりたいよお母さん」

不意に、そんな台詞が俺の口から漏れた。はて、二歳児ってのはこんなに流暢に喋れたっけか。そんな事を思いながらも、口から飛び出した言葉に俺自身驚いていた。

「ああ、すまないな」

そう笑いながら手を退ける母。そう、母だ。

実に奇妙だが、先程覚醒したばかりだというのに、俺は彼女を母だと思ふ事に抵抗を感じなかった。何故だろう。

それは、意識が伴っていないくても二年間を共に過ごしたから、なのかもしれない。実際どうなのかは知らんが。

とにかく、目の前で微笑む女性は俺の母で、俺はディオ・ブランドーだと、神様の手紙に書いてあった事が頭ではなく心で理解出来た。

「さてと。……うん？」

俺が奇妙な感覚に浸っていると、突如母の顔からは笑みが消え、代わりに焦燥が浮かんた。母は腕時計を見詰めている。

「デイト！ 早く着替えて！」

「え？」

「時間が無いんだ、ほら早く！」

言う口の下に母は俺の小さな体を包む寝間着を驚異の脱がし術で取っ払った。な、何が起こったか分からなかった……なんて、ポルボル気分を味わう間も無く、俺の強制着替えは着々と進行する。

何をそんなに焦っているのか。慌ただしく着替えを完了した俺にそんな事を尋ねる余裕など無く、母に連れられ家を出た。

覚醒してからそう時間は経っていない。あまりの急展開っぷりに、俺は目を回しそうになったのだった。

『まあ、あれです。保育園って奴ですよ』

まさしくその通りだ。

頭に響く声に辟易しながら、俺は階段に腰掛けて辺りを眺める。幼児がはしゃいでいた。

此処は保育園、そんな事は分かっている。母が俺を保育園に預ける理由だって、そりゃあ分かるさ。仕事の為に俺の世話を出来ないからだ。

分かっちゃいるが、なあ。

砂場で戯れる子達を見遣る。ああ、幼い。凄く幼い超幼い。

俺が此処に居るのは仕方のない事だが、やはりこう思ってしまう。

……なんで俺が保育園で過ごさなきゃなんのか。

『二歳児ですからねえ』

ご尤もだ。

頭に響く声——後々面倒だから正体をバラすが、ロリ神様だ——に頷く俺。一人で頷いているのだから、端から見たらかなり心配な絵面である。まあ、気にはしまい。

神様の声が聞こえたのは家を出てから直ぐの事だった。

新たな体や家、要するに環境だが、それに対して適応どころかろくに考えを巡らせる間も無く実に慌忙と飛び出したものだったから、俺は状況の推移に着いていけてなかったのだろう、唐突に聞こえた神様の声には心底驚いた。

『キンクリしてもいいですか？』

第一声からこれだ。

突拍子も無く響く声もだが、その内容にも驚愕である。因みにキンクリとは『ジョジョ』に登場する時を消し飛ばすスタンド『キング・クリムゾン』の略の事だ。

時を消し飛ばす、とは、あまり見られない能力であろうが、これはつまり。

範囲内の『時間』を数秒だけ消し飛ばし、自分のみがその中で普通に動く事が出来る能力なのだ。範囲内の者はその間のことを覚えておらず、気が付くと時間が一瞬で進んだような違和感を感じるようになる。

時を消し飛ばす？

すんなよオイ。

そんな神様の声は俺にしか聞こえてないみたいで、俺は母になるべく気付かれない様に神様を嗜めながら、保育園へとやってきたのだった。

「……で、ようやくと落ち着いたから訊きますが……何の用ですか？」

『だから最初に言っただけありませんか』

最初、とはキンクリ発言の事だろうか。だろうな。

「時を消し飛ばされたら堪ったもんじゃないんですか」

『ご安心を。アレです、ビデオの早送りと同じですよ。観る側にとつては時間を飛ばした様なんですけど、それは中身が消えた訳じやありませんか？』

つまり、俺は普通に過ごせて、神様の主観では時が消し飛ぶ、とそういう事だろうか。神様に尋ねる。

『ま、そういう事です』

ふむ。

「それ、わざわざ俺に訊く必要無くないですか？」

『はい、ありませんよ。まあ、ただねえ……暇、でしてね』

「……………」

駄目神過ぎる。天使に仕事を取られてるんだっけか。それにしたつて、別れてからそう時間は経ってないってのに、暇だから連絡つて……。

「手紙には睡魔がどうかありましたか」

『ああ、はい。あの後寝ましたよ。もうぐっすりぐっすり？』

「神様と俺が別れてから、ぐっすり眠れるくらい時間が経ってるんですか？」

『んん、そうですねえ……貴方がそちらに行ってから、まだ一時間程しか経っていません』

しかし、こちらでは一日が過ぎていきます。と神様は言った。この場合『こちら』とは神様の居る場所を差す、なんて敢えて言うまでも無いが。

俺達の一時間が、神様達の日。思わず首を傾げてしまいそうな設定だ。逆ならば、まだ分かるのだが。

俺の頭に疑問符が浮かんでいる事を感じ取ったのか、神様は自動的に答えてくれた。

『私は貴方の人生で暇潰しを謀ってますからね、見逃す訳にはいかないんですよ』

じっくり観覧する為にプロパティを弄ったと、笑い混じりに言っ
てやがる。やれやれ。

因みに、今現在の通信に於いて、時間の流れによる齟齬だか何だかは起こらないのだそう。よく分からんが芸が細かいな、と俺は素直にそう思った。

『貴方だって今暇でしょう。話し相手が居る事は悪くは無いと思いますが？』

「そうですねー」

保母さんにでも見られたら頭を抱えなくなるが、確かにそうだ、そうだとさ。

見渡す限り幼児、幼児、幼児、偶に保母さん。流石にこの中の誰かに話し相手は期待出来ない。幼児は言わずもがな、保母さんは子供扱いしてくるだろうし。いや、まあ、現に子供だが。

暇なのはお互い様だった。

『暇はたっぷりありますし、どうでしょう、ここらで能力を試用してみるというのは』

能力。

目覚めてから試す間も無かった異能。本当に注文した能力が俺に与えられているのか、正直言って半信半疑だ。神様が神様だし。

「やりますか」

『そうこなくっちゃ！では早速やりましょう！』

声音を嬉々としたモノに変えた神様に促され、俺は付与された（らしい）能力を使ってみる事に。

時止めがデフォで可能なら相当ハイになるが、どうなるかと、能力を試してみる事にしたが、ふと疑問が浮上した。

「どうやって能力なんて使うんですか？」

前世……とでも言おうか、とにかく前の俺は一般普遍的な学生に過ぎず、当然の事だが漫画やアニメにあるような『特殊能力』は秘めていなかった。則ち突然頂いた能力の使用方法が分からないのだ。手紙にはノリで頑張れるな事が書かれていたが、いやいや、やはりノリじゃあ無理だろう。

『ノリでお願いします』

あ、やっぱり？

『コツとかは一応あるんですがね、言われても分からないでしょう？』

確かに。

『そうというのは自分で掴まないと。で、貴方はコツとか何だとか言う以前の話。先ずはやってみない事にはどうしようもない。そう思いませんか？』

「それは……まあ、思わなくもないですが」

しかしノリと言われても……。一体どういう風にしてみればいいのか。

神様は『さあ、やってみて！』を繰り返し、もうこちらの言に答えるつもりは無いと暗に語っていた。畜生、NPC気取りやがつて結局のところ、具体的な感覚というのはやってみなければ分からない、と。何も分かつちやいね！。

だが、神様の話だとこの世界は魔法でドンパチやる『ネギま』の世界らしいし、能力は必要不可欠。一般人として過ごすのなら別だが、ほら、やっぱり原作キャラを拝むだけでもしたいじゃん？

「……ノリ、ね」

動機は不純。ま、だけれど、やる気は多少出た気がする。

大体ノリだろうがやらなきゃ前に進まないんだ、やるしかない。
俺に与えられた能力は三つ。

波紋技術。『メタリカ』。『世界』。

まずは、波紋から試すでしょう。

「ええつと……」

ノリで、ノリで。

「……コオオオオオオオ……」

普段とは全く異なる呼吸。波紋を意識したデタラメなモノだが、

『おや』

体に奇妙な『何か』を感じた。これが波紋エネルギー……なのか？

『おめでとうございます、成功ですよ』

どうやら成功したらしい。本当にノリでやれば出来るのな。

一度こなせば感覚が分かる。俺はこの奇妙な感覚を取り敢えず記憶して、次の能力に挑む。

『簡単だったでしょう？ この調子でサクツと終わらせましょう！』

言われなくても、やるさ。

しかしながら、次の『メタリカ』はスタンド。波紋の様な呼吸法ではないのだ。

『うだうだ考えずに勢いだけでやった方がいいですよ。神様からのアドバイスです』

神様からのアドバイスなのに有り難いと思えないんだが。ともかく。

『メタリカ』は磁力で鉄分を操作する。んなもんどすりゃいいのか分からん。分かっているのは、これもノリでこなさねばならんという残念な現実だけだ。

現実是非情である。

取り敢えず、だ。こういったモノは心中で念じればどうにかなるだろうと漫画的な考えを実行してみた。すると、どうだ。

サラサラ、と地面の砂粒が動いた。あれは……砂鉄だ。『メタリカ』の力で動いているのだろうか。

やがて砂鉄は一箇所に集まり、小さなナイフの形になって動きを止めた。

『これも成功。余裕綽々ですね』

まだ『一応出来た』というだけだが、それでもノリで成功か。漫画のキャラが聞いたら「ふざけんな」と言われそうだぜ。

『さて、残るは一つ』

ラスト。『世界』だ。

こいつもノリでどうにかなるのだろう。ノリで時を止められていいのだろうか。

『いいんですよ』

モノログを読むなっちゅーに。

俺は先程『メタリカ』で作られた小さなナイフを拾い、指で挟んでぶらぶらと揺らす。

さつさとやつちまえ、だって？ まあ待て、待てよ。今まで描写してなかったが、能力を立て続けに使うのって、結構疲れるんだぜ？ 慣れてないだけでもしれんが。少しばかりインターバルを所望したっていいだろう？

そうしてナイフを揺らしていると、

『あ』

『どうしましたか』

『先生が来ましたよ』

『え？』

見ると、一人の保母さんが直ぐ傍まで接近していた。咄嗟にナイフを握り込む。二歳児の手で握り込める程小さなナイフだが、刃物には違いない。この保母さんはこいつを何処からか目敏く見付け、恐らくは没収する為にやって来たのだろう。

「デイクくん、その手の中にあるのは何かなー？ ちょっと見せて欲しいなー」

ニッコニコ、もう燦然と輝く星の様な煌めく笑顔で、保母さんはそんな事を宣った。笑顔が怖い。これは確実に怒る気だ。ナイフ所

持について叱る気だ。

別に見せるどころかくれてやつてもいいのだが、この歳（中身は一応高校生）で保母さんに怒られたくはない。
なので。

「『世界』——時よ止まれッ」

本当に、咄嗟だった。俺はこんな台詞を口にしていて、それと共に。

——世界の時が静止した。

遊んでる幼児達、宙にあるボール、保母さん。全ての動きが静止していた。いや、全てと言うと些か語弊がある。何故なら。

俺だけは、この静止した時の中を動けるのだから。

そこから、俺の行動は早かった。

今の俺が何秒程時を止められるのか、そんな事は分からない。だからこそ迅速に動いた。

俺の背後には筋骨隆々の人型スタンド『世界』が佇んでいる。俺は『世界』の手でナイフを掴むと、天に向かってぶん投げた。

すると、ナイフは徐々に勢いを失い、静止する。静止した時の中にあるのだから当然だ。

空で止まったナイフを一瞥したところで、再び時が動き出した。

『世界』の効果が切れたのだ。

「ほら、デイクン」

ニッコニコ笑顔の保母さんは気付いていない。

ナイフは既に、空をぶっ飛んでいったという事に。

『見事、時を止められましたね』

「咄嗟だったんで、実感湧きませんが」

『まあ、そんなもんですよ。ま、これで一通り能力を試せましたね。溜飲が下がりましたよ』

「溜飲なんて無かったでしょうに」

『そんな事ありませんようー。もう貴方の事が心配で心配で、夜も眠れなかつたんですよ？』

「ぐっすり寝たんじゃないんですか」

『とにかく！』

「とにかくって」

『もう私から言う事も無いですね』

「はあ」

『これからは第二の人生を、その能力と共に、ドンパチ送って下さい』

「ドンパチってなに？ ドンパチってなに？」

『ド派手なバトルを期待してますッ！』

「期待されても困りますが」

『ではでは、また何処かで会えたら会いましょう』

「勘弁して下さい」

何故かブツッ！ と音がして、それっきり神様の声は聞こえなくなった。どうやらチュートリアルモードは終了した様子。何と無く寂しく感じるのは、騒がしい奴が急に消えたからか。

これから、先程試した能力を携えた俺の、新たな人生が始まる。

——難易度がハードに設定されてませんように。

あの神様なら笑顔でルナティックに設定しそうだが、そう願わずにはいられなかった。

第3話「キンクリッ！ キンクリッ！」（前書き）

やって参りました三話目でございます。

今回、待望の原作キャラが参入しました。ふふっ、一体誰だ、ですって？ 一言で申しましょう。

エヴァたんINしたお！

つまりはそういう事だ！ 分かったか野郎共！

ΩΩΩ>ナ、ナンダッテー！？

まあ、出番は短いしエヴァらしさは無いかもしれないけど細けえ事
あいいんだよ！

登場したという事実が大切だと、僕、思うんだ……。

そんなこんなで三話目、タイトル通り駆け足で進行します。ではどうぞ。

第3話「キンクリッ！ キンクリッ！」

『キング・クリムゾン』

何やら不穏な単語が俺の鼓膜を振動させた様な気がするが、さてさて。

時は流れた。二歳児だったあの頃の俺はもう居ない。現在、俺はようやく小学校に入学を果たし、二度目となる児童ライフをそれなりに堪能している。

学校こそ違うものの、小学校生活というモノは望郷の念にも似た感覚を俺に与えてくれて、要するにデイ・モールト（非常に）懐かしくて楽しかったのだ。

一方で能力の訓練は地道に続け、『世界』で時を止めていられる時間が三秒程にもなった。因みに、最初は一秒にも満たなかったのが格段に進歩したと言える。それで気分が高揚していたから、というのも、小学校生活を楽しいと思えた要因なのかもしれない。鬼ごっこで時を止めた事は反省するぜ。

童心に返るとはよく言うが、俺はまさにそれだった。心は体に引

っ張られる……身を持って体感したね。

そういえば、俺はディオ・ブランドーという名であるが、金髪ではない。もしかすると、後々金髪になるのかもしれないが、今の時点では、俺は黒髪だ。

『キング・クリムゾンッ！』

ロリ声がこだました様な気がするが、気がするだけだと思いたい今日この頃。

俺は麻帆良学園について、ネットで検索を試みていた。正直忘れがちなのだが、此处は『魔法先生ネギま！』の世界なのだ。となると、当然麻帆良学園は実在し、その中は非常識が服着て闊歩している筈で。

超行ってみてえ。

現在、俺は小学六年生。小学生という肩書は今年度まで。来年度になると、俺は晴れて地元の中学に自動的に通う事になるだろう。しかし、そうなると原作キャラに邂逅するなんぞ到底不可能だ。漫然と日々を過ごすだけとなってしまう。折角能力まで与えられてそれなのに前世と同じ様な日常の中に身を置くなんで、どうかしてと思わないか？

というか、そんな事は神様が許さない筈だ。俺を暇潰しに利用しているのだから、野郎のつまらない毎日など見て何になる。
なので。

俺は、麻帆良学園男子中等部に入る為に、中学受験とやらの挑む事にした。小学六年生の春、一大決心である。

小学校も麻帆良だったらエスカレーター式なので大層楽だったろうが、時既に遅しとはまさにこの事だ。だからこそその受験なのだから。

「なんだ、デイオは麻帆良に興味があるのか」

「うん、そうなん——でえいッ!？」

「そうなんでえい? 江戸っ子気取りかデイオ」

気付いたら俺の後ろに、いつまでも若い母が立っていて、デイスプレイを覗いていた。相変わらず一児の母とは思えない若作りっぷりであるが、毎日見ているのだ、もう慣れた。波紋使い並に歳を食わなくても驚かない。驚かないぞ!

「うん、麻帆良か。いいところだぞ、あそこは」

まるで知っている様な言い方だ。いや、この感じだと知っているのだろうが、どうして?

俺の問いに、母は当然だろうと自分で自分を指差して、

「私は学生時代、麻帆良に居たからな」
マジでか。

「ふむ、そうかそうか。デイオは麻帆良に行きたいんだな」
しきりに頷き、母は笑った。

「行くか?」

「え?」

「麻帆良学園女子……じゃないな、男子中等部に」

俺が一大決心した事を、母はたやすく言っただけのけた。表情は未だ笑顔だ。

「ええっと、うん。実は、受験とかしようになって思ってる」

「受験?」

受験という単語に、母は首を傾げる。

「ディオ、受験なんかするつもりだったのか？」

「え、うん。そりゃあ受験して合格しないと入れないでしょ」

「……ふふふ。ディオ、そんな事はしなくてもいいんだよ」

しなくてもいい？ 薄く笑う母は実に愉快そうだ。どうしたというのか。

「もう一度訊く。麻帆良学園に行きたいんだな？」

意図は分らないが、母に再度そう訊かれ、俺は反射的に頷く。

いや、行く気マンマンだから結局頷いていたが。

「なら、全て私に任せなさい」

「いや、任せるって、何をさ」

「ふふ、若い時に作ったコネクションがあつてだな……」

お母さん、顔が怖いです。

綺麗な笑顔をあくどい笑みに変換した母の姿は素敵に不敵だった。母にどういったコネがあるのか、それと俺の麻帆良行き願望にどんな繋がりがあるのか、俺には分からなかったってか考えたくなかった。

その後、俺は無事に麻帆良学園男子中等部に入る事が出来たのだが、一体裏では何が行われていたのか、母は何をしたのか、俺は知る由も無かった。

『えいやっ！ キンクリッ！』

そろそろ、時折耳に届く台詞がおざなりになり始めた様に思う。

それはさておき、俺は麻帆良学園に入学した。まあ、そいつは以前に報告した次第であるが。

時の流れは早い。既に、俺は中学二年生になっていた。

一日一回は各能力を使用し、神様とそれとなしに交流をして、勉強はおざなり。けれどもエスカレーター式なので気にする事も無く、今日も俺はのんびりと過ごしている。

そういえば、世界樹には大層驚いた。

今では慣れてしまつて一瞥もしないが、当初目にした時は何処のファンタジー世界に迷い込んだのかと思った。最初っから此処はファンタジーな世界なのだが、自分の中に根付いている常識だとかが打ち碎かれた様な、そんな錯覚さえ覚えた。

と、月並みな単語をこれでもかと並べてみたが、これは中々に笑える。自分で言っておいてアレだが、ちゃんちゃらおかしい。

俺は一度死んでいて、神様に邂逅していて、その時点で常識なんてモノは脆くも崩れ落ちているのだから。いや、とは言つても常識はしっかり持ち合わせているから心配しないでくれ。

まあ、しかしだ、もう十年程前に衝撃的なイベントを経験した俺でも、世界樹の大きさには確かに驚いた。驚天動地さ。

今ではすっかり日常の一部だが。

『うーん』

と、世界樹前広場にてぼんやりしていた俺の耳に、いや、『頭に届いたのは、幼さを感じさせる声。お馴染みのロリ神様である。

頭に響くこの声にもすっかり慣れてしまった。神様とこんなにも交流がある人間もそうそう居ないだろうぜ。

「どうかしましたか」

『ん、麻帆良に来たというのにイベントが無いなあ、と思いまして
そりゃあ、普通に学生やってりゃそうなるだろう。』

実はこの時代、原作開始時より過去に位置する様なので、俺達が
既知のイベントは起こりそうにないのだ。

神様が計算したところ、原作開始時——つまりところネギ・スプ
リングフィールド来日の時——には、俺は二十四歳であるとの事。
ギリ二十代前半だ。

子供にオジサン呼ばわりされかねん年齢だった。

『そういえば、タカミチさんはこの時代、大学生くらいですよ。タ
カミチさんでも探しませんか？』

タカミチ……タカミチ・T・高畑か。

ふむ。

「勘弁」

徒労に終わりそうだ。

「そんな無駄な事をするくらいなら、エヴァンジェリンに会いに行
きますね、俺は」

非常にネギまファンから人気のあるエヴァ。無論、俺も大好きな
キャラだ。……いや、ロリコンじゃないから、指とか差さないで。

『えー、彼女は止めておきましょうーよー』

言葉尻をにゅーいと延長した神様に、俺は待ったを掛けられてし
まった。理由を問い質してみる。

『いや、だって、キャラ、被ってるじゃないですか』

「馬鹿なの？」

『酷いッ！』

被ってねえから。全然被ってねえから。ベクトル真逆だから。

「かろうじて、幼いつて部分だけは被ってますが」

『だ、だけじゃないですよ！ ありとあらゆる面で被りまくりです
よー！』

吐かしおる。

神様とエヴァの共通項と言えば幼い事と人外な事以外パツと思いつかないが、しかし神様は思うがままに姿を変えられる筈だ。それを考慮するとただでさえ少ない共通項が更に少なくなってしまった。というか神様は何故にいつまでもいつまでもロリロリなままなのだろうか。

『気に入らしてね』

さいですか。

『そんな事は貴方の死因くらいどうでもいい事なんですよ！』

「……………」

『えっ、ちよっ、さめざめと泣かないで下さいよ！』

以前に神様の部屋で見せられた自分の死に様の情けなさが脳裏を過ぎり、思わず涙が溢れてしまった。あんなの黒歴史認定だ、誰にも話せやしない。ちくしょう。

力強く涙を拭う。今の俺はあの頃とは違うのだ、過去とは決別しなくてはならない。

こんな決別をするのは古今東西俺くらいなもんじゃないだろうか。更に泣ける。

『あっ』

俺が心中で流れる涙に目を背けていると、不意に神様が声を上げた。

『タカミチさんとエヴァさんですよ』

何だって？

広場の下——眼下に広がる階段を見遣る、と、スーツを着込んだ男と、

「ゴスロリ……だと……」

ゴスロリ服に身を包んだ少女が居た。

彼らはこちらに背を向けていて、顔を窺う事は出来ない。なので、本当の本当に、二人が待望の原作キャラなのかどうかは、俺の目からは定かではないのだが……。

『あっ』

もう一度、神様が声を上げる。今度は俺も即座に気付いた。

二人は、前から来たガタイのいい男共に絡まれて立ち止まっていた。因縁でも付けられているのかもしれない、が、しかし。

いきなり、男達の体がぐらりと傾く。

アレは……、

『生無音拳！ 生無音拳ですよデイオさんッ！』

その光景を見て、神様がやたらと興奮している。疑ってすみません、どう考えてもタカミチ・Ｔ・高畑です本当にありがとうございます。ごさいます。

突如倒れた男は、タカミチお得意の見えない攻撃で顎を打ち抜かれて崩れ落ちた様子。

「大学生、なんですすよね？」

『ええ、多分』

若い時から『死の眼鏡』デスメガネの片鱗は見せていたという事か。そりゃ

あ、修業はしてるんだろうし当然だろうが、恐ろしい。敵対したくはないものだ。いざとなれば時止めてトンスラこくがな！

『時止めをそんな事に使わないで下さいよ』

「モノローグを読まないで下さいよ」

まったく、神様はまったく。プライバシーというモノを意に介する様子が無い。いや、もう慣例と言ってもいいくらいには慣れたが、やれやれと頭を抱える俺に、神様はゆるゆると言葉を投げ付けてくる。

『で、どうします？』

「……何がです」

『嫌ですねぇ、分かってるんでしょ？ 彼らに絡むか、絡まないか』

「絡むに決まってるでしょう」

即決。

俺は言っ口の下から、男共の屍を踏み越えて行く彼らに向かい歩を進めた。

しかしどうしたものか。

頭を悩ませる。

結局、俺は踏ん切りがつかず、話し掛ける事すら出来ずにいた。そもそもどうやって話し掛けるんだって感じたが。

『もし、その吸血鬼のお嬢さん、みたいな感じはどうですかね』

「エターナルフォースブリザードを喰らってそちらに帰還しろと申すか」

怪しさマックスじゃないか、そんなの。凍え死ぬのはごめんだ。

『彼女、今は魔法使えませんか？』

「別荘に引きずり込まれればオシマイですね分かります」

そうやって、話し掛けられないものだから、俺は彼らをしばらく追っていた。尾行する様な形になってしまっているが、気にしない事にしよう。気にしたら負けかなって思ってる。

『絶賛ストーリーキング中ですね』

認めたくはないが事実であつた。若さ故の過ちというやつだ。

二人を追って何処までも行く。しかし未だ世界樹からは大して遠ざかってはいない。二人が入り組んだ道をぐんぐん進んでいるからだ。……って、

「もうバレてんじゃないの、これ」

「その通り」

背後から声。

男の声だ。

背筋がぞわりと粟立ったのを感じた。

気付けば俺の前を行っていた二人は、俺を前後で挟む様にして立っていた。タカミチが後ろ、前には、エヴァンジェリン。

「貴様、先程から私達を着けていたな」

ずいつ、とエヴァが迫る。吐息が掛かる距離に、彼女の顔があった。

『キスしちゃいましょうよ、キス』

くつくつとほのかに笑い声を交えて、最悪の冗談をほざきやがる。黙れ。俺は凄惨な死は向かえたくない。

「僕らに、何か用でもあるのかな？」

後ろで、タカミチの声が聞こえる。何と言うか、プレッシャーが俺の背中を打ち付けていた。前から後ろから、痛い痛い。圧死しそうだ。

「何でこんな敵対心剥き出し何だよ」

『着けてたからじゃないですか？』

「だからってこれは……度が過ぎるだろ」

神様とぼそぼそ会話していると、エヴァが険しい表情で鼻を鳴らし。

「ふん、貴様が単なるストーカーならば捨て置いたさ」

聞いてらしたのね、このおぜうさま。

「だが、奇妙な力を持った輩に後を着けられるというのは、非常に気分が悪い」

『そりゃあ、そうでしょうねえ』

目の前の少女とは裏腹に、愉快そうに笑う神様。笑い事じゃないんだが。

というか、奇妙な力、ね。奇妙と評するからには、魔力とは異質

の力を感じ取っているのだろうか。

『多分、私との念話が原因です』
切れ。

「何が目的だ？ 私達に近付いてどうする？」

どうするつもりも無いんですけど。とは言えない。きつと言ったところで信じて貰えないに決まっている。

返答に窮して何も言えないでいると、

「だんまりか、まあ、いい」

エヴァの口元がくつと吊り上がる。

「快く話す気にさせてやるだけだ」

瞬間、俺は誰にも触れられていないのに、宙に投げ出された。

「うえッ!？」

声が裏返ったが構わない。構ってられるか。

咄嗟の出来事に何の対処も出来ず、俺はぶざまにも地面に転がった。痛つ。

……これは、人形使いのスキル……。

自分の手足を目を凝らし見遣ると、確かに糸が巻き付いているのが見て取れた。おいおい、全く拳動すら見えなかったぞ。

「話す気に、なったか？」

エヴァは、いい笑顔だった。いつそ戦慄するくらいに。少しばかり体が震えた。

俺はそんな自分の様子を誤魔化す様に、虚勢を張って口を開く。

「……生憎と、最初っから話す事なんて無くてね」

「……ほう」

エヴァたん目が怖い。しかし、目を逸らさずに、俺は『捨て台詞』を吐いた。

「ゴスロリっ娘に不幸あれ」

「なっ」

あまりにもあんまりな俺の台詞に、こめかみをひくつかせ、言い返そうとするエヴァだが、残念、此処からはずっと俺のターンだ。

——時よ止まれ。

言葉と同時に、世界の時が静止する。

俺が時を止めていられるのは、小学生の頃より延びて、約五秒。その間に、エヴァの糸から逃げおおせねばならない。

即座に『メタリカ』でナイフを生成、お手製のそいつで糸を切つて……切つて……切れない……だと……！？

想定外過ぎて泣ける。

クソッ、ならば仕方ない。俺は筋骨隆々の『世界』を繰り出す。はち切れんばかりの筋肉に覆われたこいつなら、糸を引きちぎるくらい造作も無いだろう。そう思いたい。

時間が無い、さつさと拘束を解いてトンスラしないと。

ブチブチと、糸が切れる音がする。やはり『世界』の力は世界一イイイッ！ ナチスの科学力なんぞ足元にも及ばないぜ。

最後の一本が切れた。これで俺を縛るモノは無くなった。晴れて自由の身だ。

此処まで僅か三秒！ 止まった時の中で三秒とはおかしな表現だが、とにかく三秒程が経過している。

俺はそそくさとエヴァの真横を通り、そのまま路地の奥へ向かう。……そろそろ限界だ。

——そして時は動き出す。

「はっ、い、居ないッ!？」

「エヴァ！ 後ろだ!」

「…………馬鹿な…………一瞬で移動した…………？瞬動ではない…………一体…………」

何やら頭を悩ませていらつしやる様だが、俺はそんなゴスロリっ娘を尻目にすたこらと去っていく。

インターバルの後に、再度時を止める。タカミチに瞬動で追われでもしたら厄介どころの話ではない。俺には時止めを除けば圧倒的に速さが足りないのだから。

『情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さア！そして何よりもオ——速さが足りないッ！』

神様は、相変わらずだった。

『奇妙な出会いになっちゃいましたね』

奇妙で済めばいいのだが。

寮の自室、そのベッドで、俺は盛大に寝転がっていた。何だか非常に疲れた気がする。

『気疲れですかねえ』

専門家にそう言われても不思議ではあるまい。まったく、やれやれだ。

『ま、こんな日もありますよ。きっと今日はぐっすり寝れますね』
でしょうね。もう瞼は落ち掛かってるもの。

『では、就寝ですか？』

そうなりますかねえ。

先程から俺は口を開けていないが、それでも会話が成り立つのは、偏に相手が神様だからであるのは、まあ、分かるだろう。声を出すのも億劫なので非常に助かる。

『ふむ……そうですか』

一拍の間、そして。

『お休みなさい、デイトさん』

はい、お休みなさい、神様。

その言葉を最後に、俺は意識を手放した。
暗転。

余談となるが、俺は後日学園長に呼び出されエヴァ&タカミチと
の一件に関して問い質された。上手い逃げ口上が思い浮かばなかつ
た俺は、自身の能力と魔法の知識（要は原作知識）をひけらかし、
結果、晴れて魔法生徒になったのだった。ちゃんちゃん。

ふふ……どうしてこうなった。

第3話「キンクリッ！ キンクリッ！」（後書き）

神様「次回も、キンクリ、キンクリ！」

止めれ。

第4話「お久しぶりですね」（前書き）

前回の最後に余談ってあったじゃない？ スマン、ありや嘘だ。

余談とか言っておきながら、その余談を今回がつつり書いてます。気付いたらそうなっていたです。

取り敢えず今回はチャチャゼロさんが登場します。何気書くのが一番楽しかったのがチャチャゼロさんだったぜ！

第4話「お久しぶりですね」

経歴は一般人。けれども、魔法に関する知識を少なからず有していて、更には時を止めるといって、非常に稀有な能力を備えている。

それが、ディオ・ブランドーが事もなげに言い放った全て。経歴については、学園側が調べたが。

魔法世界でなまはげの扱いを受ける吸血鬼の真祖も、これには目を白黒させ、後頭部が異様に長い学園の長は「ほっ」と言葉に詰まっていた。

一般人が、どうして魔法を知っているのか。魔法関係者の情報管理は、一般人がその内容を容易に知る事が出来る程にずさんなのか。そんな筈は無い。

情報の秘匿はしっかり成されている。一般人に知れば記憶消去、それが魔法使いの常套手段で、常識だ。

ならば、ディオ・ブランドーは何処で、誰から魔法の事を知ったのだろう。

それが一つ目の疑問。疑問は、もう一つある。

いかに魔法を知り得ていようと、ディオ・ブランドーが一般人相当なのは経歴を見れば明らか。

けれども彼は『時間停止』能力を身に宿している。それは一般人には無縁の力だ。学園長の孫は非常に強大な魔力を秘めていると言うが、そういった『生まれつきの特殊なアドバンテージ』というモノは、それ相応の出生で無ければ身につかない。そういったケースの方が多い訳だ。

しかし何度も言うが、ディオ・ブランドーの生い立ち是一般人そのものである。

彼が能力を有するのは、あまりに不可思議だ。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは呻吟する様に声を漏らした。

どうにも納得してはくれないみたいだ。

俺は心中にて盛大な溜息をつく。どうしてこうなったのだろう。

今日は休日だった。休日で、のんびり出来る筈だった。

数日前のエヴァミチ（略してみた）騒動で心身共に随分と疲弊していたモノだから、ぐっすり眠ろうと画策していたのだ。

しかし現実是非情だった。

俺はエヴァミチの件で学園長に呼び出され、憐れ折角の休みは彼方へと消え去っていった。

エヴァとタカミチの証言から俺を特定した学園側には心底脱帽である。個人情報の保護はこの学園では確然たるモノではないのだ。なんて学園だ、信じられない。

さて、呼び出された俺は素直に、もとい諦観気味に自身の情報を提示してみせたのだったが、どうやらそれが事態をややこしくしている様子で。

一般人の癖に魔法は知ってるわ時止め出来るわで、俺の出自は激しく疑われているのが現状。やれやれだぜ。

「ディオ・ブランドーくん」

声を上げたのは学園長。俺は異常な後頭部を凝視しつつ応える。

「何でしょうか学園長」

「うむ、些か確認したい事があってな。もしかとは思うが――」

そう言つて学園長は、俺の母親の名を口にした。もしか君はこの人の息子か、だとさ。それがどうしたというのか。……いや、学園長よ、何故に我が母を知っている。

取り敢えず、俺は無言で顎を引く。

「ほつ、やはりそうじゃったか。いやいや、何故君の名前を知った時点で、彼女との関連性が浮かばなかったのか。ふむ、君が彼女の息子であるというのなら、疑問は解消されたも同然じゃな」

俺のブランドーという姓は母と同じだ。別れたのか墓の下なのか定かではない父親の姓ではない。なので、母を知る者ならば俺の名前を聞いてピンとくるのは、まあ然るべきなのだが。

母が過去に麻帆良学園に在籍していたにしても、学園長が一生徒の名前を覚えているものだろうか。生徒の名前を逐一覚える様な殊勝な性格ではないと思うのだが。

「おいジジイ、何を一人で意を得たとばかりに頷いている」

うんうんと頷く学園長に、痺れを切らせたゴスロリ娘さんが牙を向く。これには俺も同感だ。

ウチの母親はうら若き乙女（外見上は）で、一人で俺を養つてくれて、何と言うか、立派な母親であるが。

俺がその母親の息子だと判明して、何故魔法を知っている事や能力を持っている事が納得出来るのだろうか。

いや、一つ察しがつく理由が、無い訳ではない。母は此処――麻帆良の地にて魔法生徒だったと考えれば、学園長の言い分に符合するだろう。

あくまで仮定だが、母が魔法関係者なのだとすれば、その子供である俺が魔法を知っていて、能力を持っていたとしても、まあ、先程よりは納得に足るのではないだろうか。

いつぞやのコネとやらは、魔法関係で培ったコネだったのかもしれない。

つまりは。

学園長は今、俺が母から魔法を教えて貰ったと考えていて、そう思っている方が俺としては楽だという事か。

素直に有りのままを話すと、寧ろ信憑性が掻き消えてしまいかねないので、俺は即座に学園長に同調する事を決めたのだった。

『お久しぶりですね』

辺りには広がらず、私の頭にだけ収束する少女の声。幼い様で、しかし何処か威容を感じさせる不思議な声。

昔とは随分違うな。聞こえる声に違和感を感じながらも、直ぐさま返答する。声が違っても、念話で久しぶりだなんて言うてくる奴は、私の知る限り一人だけだ。

「ふむ、久しぶりだね、神様」

『変わり無い様で嬉しいですよ』

くつくつと笑う神様。変わり無いのはあちらも同じみたいだ。
「突然どうしたのかな？　というか、何故声が幼女みたいになって

いるんだ？」

『趣味です』

「落ちぶれたか」

『ちよっ』

わーわーと喚き立てる。喧しい事この上ない。この念話の事は熟知しているので、難無く回線を切断する。ブチッという音は幻聴だろうか。

しかし、念話回復。

『何で切るんですか、もー』

「喧しいからだが」

『誰に対しても態度を変えないのは貴女の個性ですけどね、せめて神様にくらい敬語使うとかしましょうよ』

敬語……敬えと？

「そっというのは私の息子が担当しているだろう？」

『ありや、バレてました？』

私の息子——ディオが、この神と繋がっている事は既に分かっていた。恐らくは特殊な能力でも貰った転生者だという事も。

何故分かるのかって？ それは——私も転生者に外ならないからだ。

私は鼻を鳴らす。

「そっちとする念話は感知し易いんでね」

『ああ……ちよっと前にも気取られましたねえ。……改良の余地有りだなあ』

むむむ……と、神が思考の深淵へ臨もうとしているので、取り敢えず引つ張り出す事にする。

「で、結局どうしたんだ。セピア色の思い出でも語るつもりか？」

『まさか、違いますよ。ええっと、ですね……』

そこで言い淀む。何か躊躇っている様だった。

「ディオの事か？」

なので、こちらから踏み入る。向こうの用件と言えばこれくらい

だと思うが。

『……本当、貴女は変わりませんね』
どうやら凶星だった様だ。

『そうです、貴女のお子さんの事で、少しお話が』
「転生者がどうのという話ならする必要は無いぞ」

『何でそう先回りするんです貴女は』

思えば出会った時からそうだった、と、やはりセピア色の思い出に浸ろうとする神。それに乗っかるのも構わないが、あまり脱線するのは宜しくない。

『いつ、気付いたんです？』

息子の正体に、か。

「二歳頃かな」

『うーわー、最初っからだー』

「言ったろう、そちらの念話は感知し易い。それに、何となくデイオが変わった様な気がした」

あの子は偶に年不相応な振る舞いを見せる時があった。本人は子供っぽいフリをしているつもりなのだろうが、実際はちぐはぐというか。

「ま、デイオの『前世』には興味ないさ。あの子は間違いなく私の息子なんだし」

『……そうですか。まあ、気にしてないならいいんですけどね』

私だつて転生者だ、デイオの気持ちは分からないでもない。転生云々は、他人に勘繰られたくはないものだ。

勘繰られたくないなら勘繰らないし、あの子が精一杯子供の演技を続けるのならそれを指摘しはしない。だからこそ、私もあの子に對しては普通の主婦で通してきたのだ。魔法に関しては、何一つ教えていない。

『あ、そうそう、そうでした。その事でもお話が』

モノローグを読むんじゃない。

『親子揃って同じ事を……そんな細かい事は気にするもんじゃない』

ですよ』

デイトも苦勞してそうだった。強く生きるよ。

コホン、と一つ咳払いをし、神は言う。

『どうも彼は、貴女と同じ道を歩む事になりそうですよ』
なんだと？

「……神よ、因みにデイトには能力を与えたのか？」

『勿論。時間停止能力、磁力で鉄分を操る能力、生命エネルギーを操る波紋技術。これら三つをあげましたよ』

時間停止とは……またとんでもないモノをホイホイと与えるな、この神は。いや、私も転生前にはホイホイ受け取ったものだが。

という事は、成る程、そのうちのどれかを使用しているのがバレて、お偉方の下まで引つ張り出されたといったところか。

デイトは一般での入学だったからなあ、私の名は使い入学し易くしたが、ふむ、こんな事なら始めから魔法関係者として入れれば良かったな。

「まあ、そんな力があるなら、魔法生徒としてやっていけるだろう」
私の息子なのだから。学園長も気付くだろうし。誤解されてたらそんなものは直ぐに氷解する。

『あら、首を突っ込んだりはしないんですか？』

「あの子の問題に私が関わってどうする」

親の目なんか気にしたくないだろうし。のびのびとさせてやろうじゃないか。

ただ——ふむ。

「偶には、青春時代を過ごしたあそこに赴くのも悪くはないかもしれないな」

あの、麻帆良の地に。

『ほっほっ……これは』

面白くなつてきそうですね。

神の小さな小さな呟きには敢えて突っ込まず、私は思い出の場所に思いを馳せた。

まあ、それはそれとして。

「そういえば、突然の連絡の理由をまだ聞いてなかったな」

『や、さしたる理由は無いですよ』

強いて言うなら、と二の句を継ぐ。

『ふと貴女の事を思い出したからです』

「……………」

本当にさしたる理由は無かった。というか、私は忘れられてたのか。何て奴だ、神の癖に。

『ま、これを期に、また宜しくお願いしますよ』

「……………はア」

——やれやれだ。

今後は魔法生徒として扱う、という事で今回の会談は終了しました。こうしてディオ・ブランドーも学園の怪しい噂話の一角に立つ事を余儀なくされたのだった。

この度の、一連の騒動に於ける教訓は『ノリで生きては身を滅ぼ

す』とか、そんな感じ。いや、滅んじやいないがね。

「その時を止める能力、是非とも学園の為に活かして欲しいのお」

「……努力しますよ」

「……………」

俺に戦闘能力がそれなりにあるとはまだ認められていないので、一応俺は戦闘要員ではないらしいのだが。戦闘要員に昇格の可能性は充分にあるらしい。

ところで、先程からエヴァさんが無言なのは何故だろう。凄く怖い超怖い。

俺は吸血鬼さんから逃げる様に、学園長に退出の旨を伝える。エターナルロリの癖しやがって纏う空気が怖えんだよエヴァ。

「待て」

と、学園長室の重厚な扉を開いた時、エヴァから声が掛かった。ぎこちなく振り向く。

「……ナンデシヨウ？」

「いやなに、大した事じゃない。この後少しばかり私に付き合え」

話がある、とエヴァは一片の笑みも無く言う。大した事過ぎて今すぐ帰りたいんですけど。

時を止めて全力逃亡するのも一手だが、エヴァの俺に対する苛立ちが心の根幹に根付いてしまいそうなので極力避けたいところである。

なので、俺は笑顔で了承する事に。くそつ、顔筋が上手く動かないぞ、俺はちゃんと笑えているのだろうか。

「……ふん。なら行くぞ、着いてこい」

俺の顔を見て鼻を鳴らし、パーティー編成を命令してきやつた踵を返し退室するエヴァに、俺は怖ず怖ずと着いていく。退室直前には学園長に一礼。どんなに頭がぬらりひよんでも、一応は学園の長なのだ。形式的にでも敬わねばなるまい。あー凄い頭。

俺は『童姿の闇の魔王』の背中を見詰める。さながら俺は序盤のマップに配置されている雑魚だろう。あまりに釣り合わないパーテ

イーではある。

リノリウムの床を歩いて、そのうち、校舎から出た。

何処に向かっているというのか、エヴァは無言でひたすらに歩いていく。で、俺はその後を追う。通報されないだろうな、俺。

幼女を付け回す中学生の図、みたいな感じに見えない事も無い。そう見られてたら布団で簀巻き状態になって、ディオ・ブランドーから布団ぐるぐる巻きの郷土妖怪スマキンに進化（いや寧ろ退化）してしまいそうだ。

……うーん、げんなり。

そうして歩いていくうちに、とうとう俺の記憶に無い道を通り、そして抜けて――

「入れ、茶くらい出してやる」

――マクダウェルさん家のログハウスっぽいところまでやってきた。

「……………」

ネギまの転生物に於いて、エヴァと何らかの関係を持つ作品は極めて多い。それはやはりエヴァと良好な関係を築いた方が盤石だからだろう。後ろ盾とか、そういうモノが。

俺は見事にテンプレートな展開を進んでいるのかもしれない。

まあ、俺には神様という最高の後ろ盾があるけれども。いや、アレを当てにして良いものだろうか。

「何をしている、さっさと入れ」

おっかない声が鼓膜を震わせたので、思考を中断して駆け寄る。

おじゃましてーすと小声で口にし、ずかずかと踏み入るエヴァに続く。

「……おお」

思わず声が漏れる。

ログハウスの内装は結構ファンシー。テーブルの上には人形が散乱していたり、ソファーにも人形が腰掛けてしまっている。……なんか十字架まであるんだが、ええっと、吸血鬼ですよね？

「女の部屋をジロジロ見るな阿呆」

エヴァがこちらを見遣りそう言うが、世にも珍しい吸血鬼の住家だ、ジロジロ見てしまうのは致し方ないと思つて欲しい。

それはともかくとして、やはり吸血鬼は恐ろしいのでジロジロ見るのは止める事にする。弱いと言わないでくれ、こちらら善良な一市民に過ぎないんだから。少々特殊な。

「その辺に座れ。茶を用意する」

その辺つて、どの辺？

どこもかしこもドールで溢れてるんだが。流石人形使いである。取り敢えず、ソファーに鎮座しますお人形さん達を僅かながら隅に押しやり、自分の座るスペースを確保する。人形と相席になるとは……思いもなかった。

幼い頃にはぬいぐるみに囲まれて育つた俺だが、ぬいぐるみと人形は違う。何が違つて、簡単に言つと、子供がキャッキャッはしやぐのがぬいぐるみ、子供がわんわん泣きかねないのが人形である。俺はそう認識している。

そんな人形の存在を隣に感じ、肩身狭く座る俺の前——にあるテーブル——に、トンと湯気が立ち上る湯飲みが置かれた。提供者は勿論エヴァである。

エヴァ宅に来るのを夢想した事は無いと言えば嘘になるが、茶が出されるとは思ひもなかった。今回は思ひもしない事が多い。しかも湯飲みだ、驚きも大きい。

エヴァは俺の対面にあるソファーに腰掛けた。

「さて……今回貴様を呼んだのは、再確認の為だ」

テーブルに置いた湯飲みとは別に、自分の手に納めた湯飲みを口に近付け茶を啜る。そうしてからエヴァは話を切り出した。

「再確認？」

「ああ」

また、茶を啜る。

「『本当に時を止められるのか。それを落ち着いて判断しろ』……」

あのジジイの依頼だ」

ぬらりひょんめ……。

「私としては面倒で敵わん。貴様の言い分が嘘だろうが真実だろうが、私には何の関係も無いんでな」

とはいえ、とエヴァは続ける。

「私には『のつぴきならない事情』というやつがある。忌々しいが、私はジジイの依頼を遂行しなければならない」

学園の警備員さんは大変ストレスが溜まる様だった。幼い少女の顔が憎々しげに歪んでいる。心底嫌々って感じた。俺だって嫌だ。

「という訳で——おい、さっさと時を止めてみせる」

「え、今すぐ？」

「発動に条件が無いなら今すぐだ」

眼光鋭く急かされる。分かりましたよと。俺は時を止める——その前に。

「じゃあ今から時を止める。えー……あそこにある人形を取ってくる事にするよ」

俺が目をつけたのはエヴァの向こうにある一つの人形。窓際にちょこんと乗っている慎ましやかな態度の人形である。ソファーにぐでーっとしている人形に比べれば大半は慎ましやかだが。

ともかく、俺はそいつを取るとエヴァに伝えて——時を止める。

約五秒。俺はその間にソファーから立ち上がり、エヴァの後ろに回って、窓際に座る人形を掴む。

——なーんか見覚えのある人形だな。

手に持った人形をまじまじと見詰め、首を傾げ、ソファーに舞い戻る。時間的には余裕綽々。

時が動き出す。

「ほっ」

エヴァが直ぐに俺の手元を見て声を上げる。

「速い——ではないな。やはり真実時を止めている、か」

思案顔で呟く。これで納得してくれないならどうしようもないよ

な。

「チャチャゼロ、お前はと思う？」

「ケケケ、コイツハ馬鹿ゲテルゼ御主人。イツ掴マレタノカサツパ
リ分カンネエ」

「う、おおッ！？」

喋った！ 先程時を止めて取ってきた人形が、突如、前触れなく、
唐突に！

ああそうか、チャチャゼロ、チャチャゼロね！ どうりで見覚え
がある筈である。

吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルのパ
トナー。エヴァが学園内に封印されている所為で魔力供給が行えず、
今では体を動かす事が出来ない。エヴァの魔力さえ戻ればそれはも
うアクティブに刃物を振り回しまくるのだが、そんなえげつない行
為も今は出来ない。

色々とクレイジーなお人形、それがチャチャゼロである。

俺の腕の中でケタケタ笑うそいつはB級ホラー感たっぷりで、そ
れ故に結構な恐ろしさだった。

「オイコラ、シツカリ持テヨナ。コチトラ指一本動力セネエんだカ
ラヨ」

指一本動かせない人形の分際で随分偉そうだなテメエ。

俺がチャチャゼロをぶん投げてやろうかと本気で画策していると、
エヴァが口を開いた。

「……やはり貴様は催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチ
なモノは使っていないか」

「御主人、認メチマオウゼ。コイツハ時ヲ止メテルツテ」

「……ああ、このまま否認しても仕方ないし、な」

エヴァは嘆息しながらそう言う。

という事は、だ。

「認めよう、ディオ・ブランドー。貴様の時間停止能力を」

この瞬間、俺は吸血鬼公認の時間停止能力者になったのだった。

特に感慨深くはない。

これで溜飲は下がった。とはいえ、俺は魔法生徒とかになっちゃったが。俺魔法使えないんだけどなあ。

「しかしディオ・ブランドー、お前は時を止める事が出来るが、それだけでは宝の持ち腐れだろう」

魔法生徒としてのこれからに頭を悩ませていると、エヴァは痛いところを突いてくる。

時止めの使用を戦闘前提で考えた場合、この世界の奴らには通用しない様に思えるのだ。いや、まあ、そんなパワーバランスを崩す様な力の持ち主とバトる必要は全く無いのだが、こうなった以上俺としては原作に絡みたいし。

詰まるところ、俺にはせめて公式バグキャラ共から身を守る程度には、力が必要かな、と。思う訳で。

目の前には六百年余りを生き抜いた吸血鬼。原作の主人公の様に、彼女に師事すればそれなりには力を得る事が出来るだろう。すんなり頷いてくれるとは思えないが。

「お前は私の系から何らかの手段で以て逃げ出した訳だから、最低限その程度の力量は備えているのだろうが」

「ごめんなさい、それ思いつ切り力技です。ブチブチッてやりました。」

「ふん、しかしその程度ではこれから先思いやられるな」

「ケケケ、思イヤルンダナ、御主人」

「処分してやろうかチャチャゼロ」

「冗談二決マツテンダロ、ケケケ」

チャチャゼロは愉快そうだった。俺の腕の中で。……ケタケタ笑うのはマジで止めてくれ。

ともかく、俺は決心してエヴァに伝えなければならぬ。俺に魔法を教えてくれと、伝えなければ。

「時にエヴァ……ンジェリン、さん」

エヴァの時点で凄いい睨まれた。呼び捨ては禁止らしい。

「……なんだ」

「いや、あの、その、ええっと、つまりアレだ」

「言いたい事があるならはっきり言え。ちんたらするな
どうしよう、心が折れそうだった。」

第4話「お久しぶりですね」（後書き）

お母さんがあんな事になるなんて思ってもみなかった。

第5話「正しい波紋の使い方（偽）」（前書き）

初の戦闘シーン！ 途中自分でも何書いてるのか分からなくなったぜやっほい！

どうも、作者の赤原 鴉の鴉の方です。テンションが狂い気味です。作品も狂い気味です。

ぶっちゃけ展開早い気がしますけど、そこは一つ寛大なお心でスルーして下さると、私は嬉しいです。

スルー希望！ スルー希望！

ではそんなスルー希望な第5話をどうぞ。

第5話「正しい波紋の使い方（偽）」

「何？ 私の弟子にだと？ アホか貴様」

一蹴。

俺の弟子入り志願はあつという間に砕け散った。

「貴様に戦い方を教える義理も義務も私には無い。大体、私は弟子は取らん。魔法を教わりたいというのならその辺の魔法先生とやらにでも頼めばいいだろう」

にべもない。いやしかし、確かにその通りではあるのだ。

わざわざエヴァに頼む必要は無い。魔法先生とか言う人達が居る以上、そちらに教鞭を振るって貰えばいいのだ。何せ先生なのだから。

でも、なあ。どちらが優秀かと言えば言つまでもない。エヴァさんの万能さはピカイチだ。

「しかしエヴァ……さん、エヴァンジェリンさん」

「なんだ」

「魔法使いの戦い方を学ぶのは、エヴァンジェリンさんを置いて他に居ないと俺は思つのです」

「……む」

そもそも俺に魔法先生の知り合いは居ない。魔法生徒扱いになつたのだから、これから顔を合わせる事になるのだろうが、まあ、単純な話。

モブキャラ的な先生とエヴァ、どちらに教えて欲しいかって事でそんなもん、エヴァに決まってるだろう。キリッ。

「俺は貴女の武勇伝を聞いただけです、耳にするその圧倒的な強さに感動すら覚えました。どうか、俺を弟子にして下さい」

内心、こんな事をぺらぺら口に出来る自分自身に感動しているのだが、それはともかく。

「……むむ」

エヴァの頬がぴくぴくと動く。一体何を思っているのだろう。あの頬のひくつきが心の揺れ動きの表面化したモノだったら嬉しいね。エヴァは腕を組み不遜な態度を取る。

「……私の強さに感動した、と」

「はい」

実際感動はしたさ。前に居た世界で、漫画を読んだ時に。反則気味の最強状態……まさしくその通りの強さを、俺は漫画で読み知っている。この体で見た事は当然ありはしないが、嘘はついていない。

「……本気か？」

「はい」

俺の返事を耳にし、エヴァの口角がくつと上がる。正真正銘不敵な笑みだ。あまり面と向かって見たいモノではない。

「……ふむ、私の事を噂とはいえ聞いたというのに、臆す事無く、あまつさえ弟子入りを志願か。……よかるう、そこまで言うならな」

「おっ」

「ただし、ただしだ。一つテストしてやる。貴様が見事テストに合格すれば弟子にしてやるう」

それは、何だか原作で見た事がある展開だった。時間軸上、俺は原作主人公のネギくんより一足も二足もお先に体験させて頂く事になる。上手くいくと、俺はネギくんの兄弟子か。

ああ、と。俺は視線を上げてファンシーなログハウスの天井を仰ぐ。

エヴァに絡んだだけで急展開だぜ神様。届くかは分らんが、俺は天にそういつた旨の念を飛ばした。みょんみょんみょんってな二ユアンスで。

神様の暇潰しもそろそろ本格化しそうだ。とは言っても、アレはこちらを見ているだけだろうが。

「テストは……そうだな、次の日曜日にでも行つとしよう。また此処に来い」

それがお開きのお言葉だった。これ以上話す事は無い。お互いに

そう思っていたのだろう、エヴァは湯飲みを片し始め、俺はそんなログハウスの主を背に歩き始めたのだった。や、一応別れの言葉は口にしたがな。

——テスト、か。

原作の時とはそもそも時代が違う。原作と同じ展開にはならないかもしれない。

こういうのって、アレか、試練ってやつか。
取り敢えず、気張っていこう。そうしよう。

臓腑を巡るは生命の力。

呼吸の度に力強さを増し全身を駆け抜ける。エネルギーの備蓄。細胞の活性化。

次第に指先へ向かい集約されるその力は、放出時には電流を彷彿とさせる形態になる。

『波紋の呼吸』で生み出されるエネルギーは太陽光と同じ波動を持つ。これは太陽光を苦手とする吸血鬼を打倒する事が出来る。の、だが……。

太陽の光を克服したエヴァには大したダメージを与える事は敵わないであろう。嫌がらせ程度が精一杯だと思う。

「ふう……」

寮の自室。同居人不在の中、俺は部屋の中央で波紋を練っていた。テストの内容はさっぱり分からないが、バトル系だった場合、そして相手がエヴァだった場合に、波紋は実に有効ではないかと思い、呼吸しながら色々考えてみたが。

「無理だな」

ブリツとさせるくらいしか出来そうにないんじゃないか？

俺の手札でやはり最も戦力になるのは本家ディオ……いや、D I O様の『世界』である事は明々白々であろう。

うーむ。

「テストがバトル系じゃありませんように」

無力な俺は、ただ祈るしかなかった。

「何がいいと思う」

希有な能力を持つ少年が去った後、ログハウスにて。外観幼い吸血鬼は、脈絡も無くそう漏らした。

ログハウス内に彼女以外の人影は見当たらないが、しかし誰も答えない、なんて事はない。近くの人形がカタカタと微かに動き言葉を返す。

「何ガツテ、何ガダヨ御主人」

「テストの事だ。何がいいと思う」

僅かながら困り顔の御主人を見て、人形——チャチャゼロは心底呆れた声音で、

「ヤレヤレ」

「おいこら、なんだその態度は」

「ダツテヨオ御主人、自分カラ『テスト』トカ言イ出シタ癖……何モ決メテ無エノカヨ」

「ぐっ……」

咄嗟に口を衝いた台詞だったのだ、あの時エヴァは何一つ考えてはいなかった。

「いいから考える！ 案を捻り出せ！」

御主人の難題に、動けない人形はしかし一瞬の後、すぐさま提案する。

「殺ツチマエバイインジャネーカ？」

「アホか、殺してどうする。……いや、待てよ。うーむ」

物騒な会話の中で、エヴァはしばし黙考する。今のチャチャゼロの意見、殺すのは却下だ、だが……。

「ふむ、決めた」

「殺ルノカ？」

「殺らん。だがチャチャゼロ、お前には一つ働いて貰うぞ」

「アン？」

人形から発された疑問の声。それを聞きながらエヴァは不敵な笑みを浮かべる。

「フフフ。ディオ・ブランドーよ、破格の条件にしてやる、だがこのテスト、易々と合格出来ると思うなよ」

フウハハハッ！

意外とファンシーな住居からは怪しい哄笑が漏れ、辺りに響いたという。

「ヤレヤレダゼ」

小さな人形の呟きは、御主人にも誰にも届く事無く消えていった。

ともあれ、テスト内容が決まったのだった。

次の日曜日——せっかくの休日が訪れるのを、些か戦々恐々とした心持ちで過ごすのはこれが初めての事だ。自分から言い出した事とはいえ、これは何と言うか、堪ったもんじゃない。めきめきと寿命が削られているかの様に感じられた。

憂鬱というのだろう、まさに。

或いは初面接前にやたらと緊張する様な感じで。

沈鬱であった。きっとクラスメートから見た俺はしけた面してつまらない事この上なかっただろう。居るだけで雰囲気が悪くなる存在みたいな。

だがまあ、勘弁してくれ。大事なテスト前だからさ。

前世での受験の時を克明に思い出す。思い出して、息を吐く。

山勘なんてクソの役にも立ちはしない。テスト内容は不明で、俺の未来は不明瞭だった。

そうして、こうして、ああして。
日曜日が、やって来た。

別荘と呼ばれる場所がある。エヴァの家のダイオラマ魔法球と呼ばれる代物の内にある、馬鹿でかい空間だ。

非常識極まりない別荘を有している点に於いて、流石と言わざるを得ない。ダイオラマ魔法球は、俺が初めて遭遇するであろう魔法的道具であった。

魔法球の中は、まさしく別荘である。俺の視界には南国リゾート風の世界が広がっていた。広大な海まである始末。原作を読んで知ってはいたが、現に見ると圧巻の一言だ。吸血鬼マジばねえ。

「ケケケケッ」

そんな南国リゾートな世界の中で、刃物を振り振り跳ね回る人形。もとい、チャチャゼロ。別荘の外では口五月蠅いぐったり人形だったというのに。

外に於いては行動選択が『喋る』一択であったチャチャゼロだが、此処では自由に動く事が出来る。何故か。

「此処は外よりも魔力が充溢しているからな、あいつもこうして動ける」

だそうです。

クレイジードールが復活。そして、この場に魔力が充溢していると言っのなら、それはエヴァにも影響している。

確かネギくんの修業時には別荘の中で恐ろしい程に魔法を使っていらっしやった。つまりは、外でなら十歳相当の力しか持ち得ない吸血鬼も、此処でならそれなりに力を振るえるという訳で。

「さて、テストのお時間だ」

エヴァがその内容を発表する。

「先ず第一に、お前にはチャチャゼロと戦って貰う」

異議ありッ！

「いやいやいや！ 何考えてんスカア！！ たたかつ、戦うだとオー！？」

バトル系テストだと申すか。

「安心シナ、死ナナイヨウ二鵬ッテヤツカラヨ」
なにそれこわい。

「そうならない様にせいぜいあがくんだな。で、だ。第二に、チャチャゼロに一撃浴びせた時点でお前の勝ちとする」

要するに、原作での弟子入りテストで、ネギくんの相手をしていた茶々丸が、チャチャゼロに変わっただけの事だった。

「たったの一撃で合格だ。どうだ？ 破格の条件と言えるだろう？」
エヴァは素敵に不敵な笑みを浮かべる。破格……いや、確かにその通りだが。

チラリとチャチャゼロを見遣る。チャチャゼロは華麗に刃物を振り回していた。

——あんなの相手じゃ……。
そもそも、当たるのか？ 何も鍛えてない俺の攻撃が。『世界』

の攻撃は素早い、何せ相手の当たり判定は人間よりも小さい。グレイズされまくってこちらがピチュる光景しか目に浮かばないんだが。

「つて、そつだ。時を止めて——」

「言つておくが時間停止は禁止だ」

「な、なんだつてー!？」

「当然だろうが。時間停止能力にあまり頼るな。不利だと思つなら機転でも効かせて窮地を脱してみるんだな」

まあ、取り敢えず、とエヴァ。

「始めるとしようか」

エヴァは綺麗に笑つたが、主力を封じられた俺には獐猛な笑みにしか見えない。

というか、俺の中では対エヴァをそれとなく想定していた為、この展開は若干予想外なのだ。

「ンジャア、行クゼ」

エヴァさんの軽い開幕宣言に背を押され、チャチャゼロがこちらにぐりんと首を向け、ケタケタと嗤う。超怖え。

そしてチャチャゼロが言葉通り、刃物を振りかぶりこちらに肉薄してくる。

つて、速え!

「ケケケケツ!」

右から迫りくる刃を、俺は咄嗟の判断で繰り出した『世界』の右腕で受け止める。

「むっ」

エヴァがこれに反応を示すが、こちらとしては構っていられない。殺人ドールが容赦なく切り掛かってくるのだ。

「ちよつ——ちよつと待つ……!」

眼前を刃が通り抜ける。日常有り得ないシチュエーションに、俺はテンパリまくっていた。

バトル漫画の主人公の様にはいかない。すぐさま戦いに順応出来

よう筈がないのだ。

いや、しかし、そんな事も言っていない。順応出来ないじゃあ駄目だ、順応しなくては。——やるぞ。

「『世界』！」

俺の言葉と同時に『世界』の像が背後に出現する。実に頼もしいその姿をちらつと見遣る。が、

「オイオイオイ、ヨソ見カヨ」

「ずわっ！」

その隙をチャチャゼロが逃す訳はなく、すかさず連撃が俺を襲う。しかしその刃が俺まで届く事はない。『世界』の腕で連撃の悉くを弾く。弾く。弾く。

その片手間に、俺は『メタリカ』で小さなナイフを生成する。此処にも鉄分はある様だった。安堵しながら、チャチャゼロ目掛けてナイフをぶん投げる。

「ケケッ」

ガキンッ！ 弾かれる。

だが、俺の手中には今の間に作り上げたナイフが一本握られている。そいつをもう一度、ぶん投げる……！

ガキンッ！ 弾かれた。

もう一本生成。ぶん投げる。

弾かれた。

ぶん投げる。

弾かれた。

チャチャゼロは俺の投げるナイフを捌きながらも、こちらへの攻撃を止めない。留まる事を知らない鋭い斬撃。何とか『世界』で以て防戦出来てはいるが、このままではじり貧だ。直に捌き切れなくなるだろう。

勝負に出た方がいい。一撃入れれば終了なんだ、その一撃に全身全霊の力を込めるッ！

瞬間、まさしく目にも留まらぬ速さで『世界』の腕が迸る。一息

に五発放たれた拳に、チャチャゼロが僅かに驚きに目を見開いた……ように思う。

けれども向こうも、この程度で陥落する筈が無い。手に持つ獲物でこちらの攻撃をいなす。まあ、それくらいは予想の範疇だ。

俺は『世界』で大きく相手の刃を弾き、少しばかり距離を取る。

「ソイツ面倒ダナ。オイ、トットト斬ラセロヤ」

そいつ、とは『世界』の事が。

え、見えてんの？ スタンドが？ マジで？ そういえばエヴァも反応していたが……まさか、あいつも見えている？

……考えてる場合じゃないな。

「すいません勘弁して下さい」

俺は言いつつ、二、三步後ずさる。

原作とは異なり、俺の場合はテストの相手が素手ではない為、下手を打つとこちらが一撃で終了となってしまうかねない。

大体、チャチャゼロは俺なんかとは踏んできた場数が違う。喧嘩すらろくにしなかった俺だ、まともにやって勝てっこない。

まあ、だったら。まともにやらなきゃいいだけの話で。

俺は『世界』を攻撃を防ぐ為だけに集中し動かす事にする。

そうそうお目に掛かれない鋭い剣閃を、自分でもよく防げているものだと自画自賛したい気分だ。

と、チャチャゼロが凄まじいとしか言えない程の速度で、俺が取った距離を一瞬で埋める。そしてすぐさま切り掛かってくる、が、「防戦一方のままじゃねえーんだよ！」

俺は迫るチャチャゼロの刃を『世界』で処理し、自前の拳で殴りに掛かった。全く鍛えていない、身体強化だとかも施していない拳で、しかし、俺は躊躇いはしなかった。

「当タルカヨ」

だが、俺の拳はチャチャゼロには至らない。奴が咄嗟に身を捻って躲したのだ。

ああ、躲された。

——それでいい、それがいい！

咄嗟に身を捻って躲した？ 生憎だが、俺のバトルフェイズはまだ終了してないぜ！

俺には神から賜った三つの能力がある。時間停止能力を備えるスタンド『世界』に、鉄分を操る『メタリカ』、そして生命エネルギーを操る術である『波紋』。

俺はチャチャゼロの猛攻を『世界』で防いでいたし、『メタリカ』で生成したナイフを投げたりもした。正直な話、これら二つに比して『波紋』はやや力不足な感じが否めない。

が、しかし。

「オオオオオッ！」

俺はチャチャゼロに躲された直後、即座に『波紋の呼吸』を行った。

臓腑を巡るは生命の力。

呼吸の度に力強さを増し全身を駆け抜ける。エネルギーの備蓄。細胞の活性化。

十二分に波紋を練ったところで、チャチャゼロに向かい伸びる腕、その関節を……外シッ、その時の痛みを波紋で和らげるッ！

「ゲッ」

異変に気付いたのだろう、チャチャゼロが声を上げるが、もう遅い。

俺の腕は関節を外した事によって幾分リーチが伸びていた。『咄嗟に身を捻って俺の拳を躲したチャチャゼロに届くくらい』には、俺の腕は伸びたのだ。

その関節の外れた腕は、俺の全霊の力を乗せて。

「ズーム……パンチッ！」

「ウゲッ」

当たった。

チャチャゼロの小さな足に。

一寸伸びた俺の拳は確かにチャチャゼロに一撃与える事が出来た

のだった。

と言つても、パンチの体裁を辛うじて保った程度の、弱々しい一発だが。

そんな弱々しいパンチに当たったチャチャゼロは、ぽてり、と地に落ち倒れた。

その光景を見てか、今まで静観していたエヴァが呟く。

「……無茶苦茶、だな」

まあ、関節外してまでパンチを浴びせたのだ、その呟きも至極当然と言えよう。

「……まあ、いいだろう」

ふつ、とニヤリとした嫌らしい笑みではなく、柔らかな笑みを浮かべた。

「正直予想外だ。能力持ちとはいえ一般人として暮らしてきた貴様が、無傷とはな」

カスみたいな一撃だったが、チャチャゼロに当たてた事は紛れもない事実だ。とエヴァは言う。カスみたいで悪かったな。

「見事だ、ディオ・ブランドー。約束通り魔法を教えてやる。いつでもウチに来な」

「は……」

ようやく、だった。ようやくその言葉を聞く事が出来た。

自然と口元が緩む。きつと締まりのない顔というやつを、今の俺は体言している事だろう。

「はいッ」

関節が外れてぶらんぶらん揺れる腕を押さえ付けて、俺は笑う。

これでようやくとスタートラインに立ったくらいか。原作までは、まだまだ日数がある。それまでに俺は、

「……ん？ 何だ、人の顔をじろじろ見て」

この、魔法関係者に恐れられる吸血鬼に師事して、どの程度の実力を得られるだろうか。

それは、まあ、俺の努力次第つてところだろうが。

「ところで」

俺が未来予想図を脳裏に描いていると、エヴァが何やら思案顔で口を開いた。

「貴様、自身の能力をまだ全て語っていないな」

そう言うエヴァの表情はムツとしたモノで、外見に見合うくらいには子供っぽかった。

「時間停止能力の他に……何だアレは」

「アレ、とは？」

「チャチャゼロの獲物を弾いていたデカブツに、急に現れたナイフ、そして、その外れた関節を放っておいても平然としていられる理由、全てを話して貰おうか」

おう、見抜かれてた。

「えー、と」

しばし逡巡する。正直、学園長のところで説明した時は面倒だったので時間停止しか言っていなかったのだ。が、理由は面倒だったというだけで。話す事に抵抗は微塵もありはしない。

俺は息を吐いてエヴァに伝える。

「……スタンドに……波紋か。そんな力は聞いた事が無いぞ」

そりゃあ、別世界の力ですから。とは言えないので適当にお茶を濁す。

「いやあ、珍しいらしいんで」

「珍しいどころではない、この世界でお前だけかもしれないぞ」

きつとそうなのだろう。この世界に俺の様な転生者はいないと思うし、いたとしてもスタンド使いである事は無い筈だ。

もしも、もしもスタンド使いが存在するのなら、いつか何処かで巡り会うだろう。『スタンド使いは引かれ合う』のだから。

「全く、お前には驚かされるな」

「俺としては、チャチャゼロやエヴァさんにスタンドが見えてる事の方が驚きなんですが」

本来、スタンドはスタンド使いにしか視認出来ない。しかしあの

テスト中、エヴァは現れた『世界』に反応していたし、チャチャゼ口も見えている様だった。一体どういう事なのか。俺が神様から貰ったスタンドは、誰にでも見える仕様なのか。

「何だ、アレは普通見えないモノなのか。だとすると、魔法使いの連中にだけは見えるのかもしれないな」

え、何故だ？

俺が軽く首を傾げたからだろう、エヴァは簡単に説明をしてくれた。

「多くの魔法使いには超感覚知覚が備わっている。それにより一般人には見る事の出来ないモノが知覚出来るという訳だ」

それは例えば霊的なモノの知覚も可能という事だから、成る程、スタンドが見える事も納得がいく。超感覚知覚、ねえ。

俺もこれから修業すれば、そんなモノが備わるのだろうか。

「ま、訊きたい事は以上だ。今日のところはよくやったと言っておこう」

「ケケケツ、今度ハシツカリ斬ッテヤツカラナ」

やはり人形は怖いと思った。

『合格おめでとうございます』

マクダウエル宅を後にした俺の頭に、お馴染みの声が響いた。神様だ。

「取り敢えず、停滞気味の毎日からは脱出、って感じですかね」

『そうですねえ。けど、良かったんですか？』

「何がです？」

『いや、原作だとネギ・スプリングフィールドが思い出すだけでガタガタ震え上がる程だったんで、さぞかし厳しい修業だった筈です。そんなのに、貴方は耐えられるんですか？』

「……………」

言葉が詰まってしまった。

『まあ、精一杯頑張って下さいね。大丈夫、きっと耐え抜けますよ。貴方には私が付いてるんですから』

それが一番心配だ。とは言わず………… いや、神様には筒抜けか。それが一番心配だ。

『………… 筒抜けと分かっていながら、敢えて二回そんな事を思う貴方が、私は割りと好きですよ』

しかし溜息を漏らす神様。どうやら今のテンションはさほど高くは無い様で。その方が楽でいいが。

それから、神様と益体も無い事を語り合いつつ、俺は寮への帰路をのんびりと歩いていったのだった。

そして後日、厳しいなんてレベルを越えた、エヴァによる魔法訓練が始まったのである。

『ああ、平和な世に。せーのっ、キング・クリムゾン！』

第5話「正しい波紋の使い方（偽）」（後書き）

神様「またまたやらせていただきましたアーン！」

またまたやつちいましたアーン。

キンクリです。ズバツとマルツとキンクリです。

今回で中学時代は終わり。修業編には入りません！ デイオくんにはそのまま大人になって頂きます！

大人になって頂きます！

大事な事だから（ry

第6話「また、時が消し飛んだ……」（前書き）

びゅーんとキンクリ。とうとうディオ少年も大人になり、原作に突入ですわよ皆様。飛び過ぎだって？ 神様のキング・クリムゾンだぜナメんな。

えー、原作突入という事で、マンガ片手にポチポチやっていた訳ですが、書いてるうちに何処で区切っていいものか迷ってしまったので、適当に区切っております。

だから何だって感じですけども。あの、ほら、一応。ね。

そして今回は説明な感じが多いです。所謂説明回というやつなのかもしれません。

だから何だって感じですけどd（ry

第6話「また、時が消し飛んだ……」

麻帆良学園中央駅前には学生達がごった返していた。麻帆良名物の通学ラッシュである。

皆一様に各校舎目掛けて駆けていく様は圧巻だ。このバイタリテイ溢れる光景には慣れるまで時間を要するだろう。

『学園生徒の皆さん、こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間。始業ベルまで十分を切りました、急ぎましょう』

流れる人込み。そんな中で、困惑気味の表情で佇む、異国の少年の姿があった。

『今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕を持った登校を……』

「急げー！」

「遅刻ー！」

「遅刻やー！」

辺りから聞こえる生徒達のそれなりに切羽詰まった声に促されたかの様に、少年は懐中時計を取り出し、見遣った。

「わ、いけない、僕も遅刻する時間だ。初日から遅れたらまずいぞ」
言って、駆け出す。

少年の名は、ネギ・スプリングフィールド。『先生』になるべく来日した、英雄の息子である。

地獄を最初に見たのが、もう何年前の事だったか。俺が既に定職に就き、働いている事を思えば遠い昔の様に感じる。

修行は辛かった。いや、辛いなんてモノではなかったのだ

ぶっちゃけるが、エヴァの組む修業内容はおかしかった。何がおかしいって、魔法初心者俺にも容赦ないのだ。スパルタなのだ。

火を点す呪文すら成功しなかった頃、成功するまで休憩など言うモノは無かったり。

ある程度基礎が固まってくれば、ひたすらチャチャゼロと模擬戦をさせられたり。

血を吸われたり。

血を吸われたり。

血を吸われたり。

拳句「お前は才能が乏しい」と言われ、練習あるのみとばかりに日に日にその内容は過酷なモノへと進化していった。

地獄を、見たのだ。

今でも修業内容を事細かに思い出そうとすると手足が震える。体が明らかに回顧する事を拒絶していた。

しかし、そんな日々も過ぎ去るのは早く、今では俺も二十四歳。

エヴァの弟子入りテストから十年程経っていた。俺はもうエヴァ直々の修業は行ってはいない。

エヴァ曰く「お前では所詮こんなもんだろう。能力と併用しろ」だそう。つまりは、俺の修業は区切りが付いたのだ。後はたゆまぬ自己研鑽のみである。

修業終了のお知らせを聞いた日は驚喜して狂喜したものだ。エヴァが指輪型の魔法発動体を譲ってくれたというのも大きい。

さておき。弟子入りからの状況の推移を、簡単にだが話しておく
としよう。

取り敢えず修業の終了が、高校生活が終わった辺りの事だ。それ
まで警備的な仕事は一切行っただ事は無かったのだが、修業終了を期
に見回り程度はやる事となった。

丁度その頃、俺の髪色は金になり、本格的にD I O様と化してき
たのは完全に余談である。

それから大学生活を経て、俺は学園長に一つ仕事を薦められた。

——教師になってみたくはないかの？

就職活動にあまり精力的に取り組んでいなかった俺は、二つ返事
で了承したのだ。

こうして俺の就職先が決定したのだ。学園長の一存で教師になる
事が出来る学園……此処で常識は通用しないのである。ああ、教員
免許はちゃんと持っているぞ、俺は取得した覚えは無いが。

流される様にして教師になってしまった俺だった。人にモノを教
えるなんて出来る訳がないと思っていたが、何だかんだ言って、
既に四年は教師をやっている。

人間は慣れる生き物なのだ。

教科書片手にやっていくのはとうに慣れた。スーツ姿で闊歩する
のも同様だ。修行のお陰か、やたらとガタイの良くなった俺にスー
ツは似合わないのだが、まあ仕方がない。ともかく。

今では女子中等部の副担任まで任されている。察している方もい
るであろう俺が副担任やっているクラスは、原作で暴れ回るあのメ
ンバーが集うあのクラスだ。テンプレであるのは言わずもがな。異
論は神様に頼む。

ともかくにも、俺は順調に地獄を見て順調に原作に食い込みつ
つあるのだった。

「やあ、デイクン」

麻帆良学園女子中等部のある校舎、その窓際には、凄く渋いおじ
様が居た。

「ああタカミチ、おはよう」

「おはよう、いい天気だね。今日は本当、清々しい朝だ」

俺の前で、タカミチ・Ｔ・高畑は柔らかな笑みを浮かべた。

俺とタカミチは出会いこそ残念な形だったものの、エヴァに弟子入りしてからはそれなりに親睦を深め合っていた。今ではタカミチと呼び捨てにする程である。向こうは『くん』付けだが、ありや仕方ない。性質みたいなもんだと俺は考えている。

よくあるたわいもない世間話の導入を口にしたタカミチに、薄く笑って答える。

「随分と嬉しそうじゃあないかタカミチ」

「え、そうかい？」

「何かあったか？」

するとタカミチは頭を掻き、

「今日、新任の教師が来る話は聞いているだろう？　実は僕の知り合いでね」

ああ、そういえば以前耳にした記憶がある。あの時はまだ来ないからと捨て置いたが、そうか、今日だったのか。

ネギ・スプリングフィールドの来日は。

「少し会うのが楽しみなんだ。最後に会ったのは随分と前の事だからね」

「ほう」

新任の教師が子供であるという情報は、当然だが教員には伝わっている。そして当然反発もあった。が、それらを跳ね退けて今日、天才少年はやってくるのだ。

確か大学卒業程度の語学力、だったか。本当かどうかは知らんが頭がいいのは確としているだろう。いや、頭がいいというか、勉強が出来るというか。

タカミチはそんな少年の成長ぶりを見たいのだろう。さしたる変化は無いだろうが、それでも。

まあ、俺も楽しみにはしているが。タカミチとは異なる意味で。

「しかし……アレだな」

「うん？」

「もうそろそろ来ないと遅刻扱いになってしまうが……」

「ああ、そうだね……っと、どうやら来た様だよ」

タカミチは廊下の窓から外を見遣る。それに倣い俺も窓外に目を向けた。

そこではツインテールの女生徒が、子供に対して声を荒げていた。黒髪の娘も居るが、笑顔で佇んでいる。両方共ウチのクラスの子と、いつの間に頭を抱えた。

「ほな、ウチら用事あるから、一人で帰ってな」

黒髪の娘——近衛木乃香がそう言つと、ツインテールの女生徒——神楽坂明日菜もそれに続く。

「じゃあねボク——」

「いや、あの、僕は……」

「いやーいいんだよ、アスナくん」

そこで、俺の隣に居るタカミチが声を掛けた。

「お久しぶりでーす！！ ネギくん！」

なんか親しげなのか他人行儀なのかよく分からないな。ともあれ下の三人は反応を示す。

「おはよーございまーす」と木乃香。

「た、高畑先生！？ お、おはよーございま……！」と明日菜。

「久しぶりタカミチーッ！」と少年。というか明らかネギくん。

「！？ ……ッ、し、知り合い……！？」

明日菜は驚いた様子を見せるが、俺にはその驚きっぷりの方が驚愕に値する。後退り過ぎだぞ、明日菜よ。

「あ、デイト先生や。おはよーございまーす」

上を見上げる三人の中で木乃香だけが唯一俺に対して挨拶をしてくれた。普通に嬉しい。俺は軽く手を振る。

「麻帆良学園へようこそ。いいところでしょう？ 『ネギ先生』」
そのタカミチの言葉に、一瞬辺りが疑問で満ちた。少々困惑した

表情で木乃香が尋ねる。

「え……せ、先生？」

「あ、ハイ、そうです」

疑問の声に、すぐさま少年は答えた。

「この度、この学校で英語の教師をやる事になりました、ネギ・スプリングフィールドです……」

「え……ええーっ!？」

先程から明日菜は驚いてばかりだが、いやはや、実際これは驚くなどという方が無理な話である。俺も多分原作を知らなかったらあんぐりしていただろうさ。

「ちょ、ちよつと待ってよ、先生ってどーいう事!? あんたみたいなガキンチョがー!」

「まーまーアスナ」

明日菜が喚ぐが、その間に俺とタカミチは校舎を出た。

「いや、彼は頭いいんだ、安心したまえ」

「先生……そんな事言われても……」

「後、今日から僕に代わって君達A組の担任になってくれるそうだよ」

その言葉に、明日菜は目に見えてショックを受けている。木乃香も突然の子供先生担任発言に少なからず戸惑っている様だ。

「デイオ先生はどないするんですかー？」

「代わらず副担任だ」

「何でよーッ!」

叫ばれても困るよね。

「デイオ先生はともかく、私こんな子嫌です! さっきだってイキナリ失恋……いや、失礼な言葉を私に……」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言っつなー!」

どんどんボルテージが上昇していくが、流石にこれ以上放っておくのはどうかという気がする。仕方がないので止めに掛かるとしよ

う。

「落ち着け神楽坂、大人げないぞ」

「大体、私はガキが嫌いなものよ！」

無視された。

「せんせー、どんまいや」

木乃香だけが優しくかった。

「あんたみたいに無神経でチビでマメでミジンコで……」

中学生が子供に接する姿とは思えない。この光景を麻帆良の外で目撃されたら、学生のモラル低下だとか何だとか叫ばれてしまうのだろう。まあ、麻帆良内だと笑い話にしかないのだが。恐るべきは麻帆良の住民の感性である。

しかし、泣きながら子供を罵倒する様は中学生としても人としてもあまり宜しくない。見ろ、ネギくんがぶんむくれているじゃあないか。

「ん……」

と、ネギくんは先程までのむっとした表情から一変して、口を開けてマヌケ面になる。

……あ、もしかしてこれは。

「はくちんっ」

直後の事だ、そのくしゃみは突風となり吹き荒れた！ 真っ正面に居た明日菜の制服は風によって吹き飛ばされる。

それはくしゃみだった。

ただし、英雄譲りの膨大な魔力を持つ少年の。

毛糸のくまパンを履いた下着姿の少女は、顔を赤く染めて、耳を劈く大声で叫びを上げた。

「キヤーツ！ 何よコレーツ！！」

「学園長先生！！ 一体どーゆー事何ですか！？」

「まあまあ、アスナちゃんや」

ジャージ姿の神楽坂明日菜は非難の目を学園長に向ける。が、ぬらりひょん顔負けの異様な頭部を誇る学園長は、蓄えに蓄えた自らの髭を撫で付けつつ、穏やかに宥める。

学園長室には明日菜、木乃香、学園長にネギくん、そして俺が集結していた。

タカミチは既に何処かへと行ってしまった。授業なのか、別の用なのかは知らないが。

「成る程、修行の為に日本で学校の先生を…… そりゃまた大変な課題をもちうたのー」

「は、はい。宜しく願います」

中学生二人は学園長の言葉に疑問符を散らす。まあ、修行だとか課題だとか、端から聞いている分には意味が分からない事なので致し方ないだろう。

「しかし、まずは教育実習という事になるかのう」

「はあ」

「今日から三月までじゃ」

十歳の少年が教育実習生となる。前代未聞とはこの事だ。しかしこの先誰も彼もこの事を受け入れるのだから、やはり麻帆良は凄い。二度目だが、此処で常識は通用しないのである。

「ところでネギくんには彼女はおるのか？ どーじゃな？ うちの孫娘なぞ」

「ややわ、じいちゃん」

ガスッ。木乃香の振るったトンカチは学園長の頭部に見事にヒットした。ツツコミとしては少々過激だが、誰もそこを指摘しはしない。いや、血イ出てるから。血イ出てるから。

俺は息を吐き、努めて低い声で告げる。

「学園長、そんな漫才紛いな事は結構ですのぞ」

「む、つれないの、デイクン」

いやしかし、それもそうじゃな、と学園長はこれまでより僅かに、僅かにその表情を真剣なモノにし、ネギに向かい語り掛けた。

「ネギくん、この修行は恐らく大変じゃぞ」

「ちょ、ちよつと待って下さいってば！」

「アスナ、抑えて抑えて」

このコンビはバランスがいいな、ホント。

学園長は明日菜の発する待ったの声を見事にスルーし、続ける。

「ダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスは無いが、その覚悟はあるのじゃな？」

全く、十歳の少年に問う事ではない。覚悟だとかそんなもん、俺が十歳の頃は考えもなかった。ガキの時分には似つかわしくないだろう。

俺は二回十歳の頃があつた訳だが、二回目でも遊び呆けてたぜ。時止めまくって。

ネギくんは学園長の言に、真面目な顔で真面目に答えた。

「は、はいっ、やります。やらせて下さいっ」

学園長が満足だと言わんばかりに笑みを深める。

「……うむ、分かった！ では今日から早速やって貰おうかの。指導教員を紹介しよう」

「指導教員ですか」

「うむ」

ネギくんの指導教員。原作では源しずな先生が担当していたこの立場だが、生憎としずな先生に出番は無い。何故ならば！

「——ディオくん」

「はい」

そう、ネギくんの指導教員はこの俺なのだ！

「分からない事があつたら彼に訊くといい」

「ネギくん」

「わ……」

「宜しく頼むよ」

「あ、ハイ……」

指導と言つても、原作でしずな先生が何かやっていた印象は大し
て無いので特にすべき事も無いであろう。つーか指導って何すれば
いいのかさっぱりだ。授業の事でも教えてやればいいのだろうか。

「そうそう、もう一つ」

人差し指を立て、学園長は事も無げに告げる。

「このか、明日菜ちゃん、しばらくはネギくんをお前達の部屋に泊
めて貰えんかの」

「げ」

「え……」

「ええよ」

それはある意味、悪魔の言葉に等しかった。若干一名難なく受け
入れていらつしやるが。

「もうっ、そんな何から何まで、学園長ーっ！」

まあ、何を言おうが学園長には通じない訳で。あのスルースキル
はリスペクトもんだと思うんだ、俺。

それにしても手持ちぶさたである。

「かわえーよこの子」

「ガキはキライなんだってば！」

二人のやり取りを眺めながら、俺は今後に思いを馳せていた。
原作通りになれば上等、俺の他にイレギュラーが混ざる様であれ

ば……さて、どうするか。

取り敢えず時止めするんだろうな。ああ、間違いない。能力に頼りっぱなしでダメな大人感たっぷりだが、これだけは確信を持つ事が出来た。

「ふー、やっと一段落だ」

スーツの上にコートを羽織り、背にはナップサックとやたらと長い棒——杖。そして手には出席簿。

現に見るとその姿は滑稽だった。大人への階段を一体何段すつ飛ばせば十歳で教師になれるのだろう。ネギくんの場合、自分で階段を登ったのではなく登らされた感がある気がしなくもないが。さもありなん。

俺はお疲れな様子で隣に行く子供先生かな労いの言葉を掛けた。

「お疲れ、ネギくん。どうだ、初めて教鞭を振るってみて」

「もう大変でしたよー、てんやわんやで何も出来ませんでした。：

…はあ、失敗しちゃったな……」

「まあ、そう落ち込むな」

あのクラス相手なのだから、初授業が潰れるのもしょうがない事

なのだ。

「次がある、頑張れ」

「デイト先生……はい、そうですね」

ネギくんの初授業は、それはそれは可哀想なモノで、平たく言うてしまえば原作通りであつた。

入室の時点からトラップの手痛い洗礼を受け、自己紹介の後はおもくちやにされ、いざ授業を始めると消しゴムを飛ばされ。それはもう酷いモノだつた。

一応ネギくんに助け船を出したりしたのだが、ウチのクラスの連中相手ではそんなモノは無に等しい。結局ネギくんの授業は原作通りに潰れた。

「あ、先生ー」

「おーホントに子供だー」

「センス、ボール取つてー」

「あ、はい」

俺達は益体も無い事をつらつらと話しながら、時折生徒に絡まれながら（主にネギくんが）帰路に着いていた。

そうして、それなりに長い階段の前を通過しようとした時。

「あれは……27番の宮崎のどかさ……沢山本持つて危ないなあ」
大量の本を抱えた宮崎が、ヨロヨロと危なげな足取りで階段を下りているのが見えた。

ネギくんの言う様に、アレは危ない。というか、これは確か落ちる展開じゃなかったか？

「あつ」

とか何とか考えていると、案の定宮崎が体勢を崩した。不味い――！

「やっぱし！」

ネギくんが動く。即座に杖を構え、落下する宮崎に向ける。

「きゃあああああ！」

悲鳴が上がるが、宮崎は地面に激突する瞬間にふわりと浮いた。

——原作通りとはいえ、魔法使っちゃったよ！

ネギくんは宮崎の下に走り出した。が。

俺はそんなネギくんを他所に、宮崎が滞空している間に、修行の成果を遺憾無く発揮した。

瞬動である。

瞬き程の間に、俺は宮崎に接近して、その体を片手で掬い上げる様にして抱えた。滑り込んできたネギくんも同様に抱える。

「あきゅ！ は……あ、あれ……？」

妙な声を出すネギくんは、突如現れて自分を抱え込んだ俺を見て困惑している様だった。怪我は無い、な。

宮崎も気絶しているだけで、外傷は無い様だ。

「え、あれ……ディオ、先、生……？」

信頼と安全の瞬動によって（ついでに）助けられたネギくんは目を白黒させているが、俺はその視線を無視する。新任いびりとかではない。いや、マジで。

脇に抱えたネギくんよりも、絶賛気絶中の宮崎よりも、俺には目を向けねばならない奴が居るのだ。

「……ディオ、先生……」

その声に、ネギくんも目を向ける。それから、呆然とした表情になった。

神楽坂明日菜が、そこに居た。

「……………」

「……………」

「あ……いや、あの……その」

例えるならばギャグが一切ウケなかった時の居た堪れない雰囲気。例えるならば初対面同士を一つの部屋に押し込んだ時に発生する気まずい雰囲気。

今、俺達はそんな何とも言えない空気の中で固まっていた。

沈黙の中、誰もがピクリとも動かない。

打開するきっかけが必要であった。現状を打破するきっかけが。

と、そんな時。

「う……せ……先生……？」

一人意識を失っていた宮崎が目覚めた。

——きっかけ……！

どうしようもない空気が崩れ去った。俺はいち早く動こうとするが、宮崎を抱えている分行動が一拍遅れてしまった。

明日菜はネギくんと杖を直ぐ様俺から奪い、ついでに俺もぐいぐいと引っ張る。よろけながらも何とか明日菜に着いていくが、速い、あまりにも。

壮絶なスピードで中学生と、抱えられた少年、それに大の男が走り去っていくその様は、滑稽どころの話ではない。一人取り残された宮崎に至っては状況すら飲み込めていないみたいで。

俺達は宮崎の視界から猛然とフェードアウトしたのだった。

第6話「また、時が消し飛んだ……」（後書き）

主人公が金髪になりました。

何処その教育ママなら「不良になっちまっただ！」と叫び散らしておいおい泣く事請け合いですね。

＼ソーデスネ／

第7話「あれ？」（前書き）

神様「出番は？」

という訳で、今回、何と、神様が登場しません。こんな筈では……。

神様は毎回登場させるつもりだったのに……どうしてこうなった。

取り敢えずお話の方は通常運行で進んでいきます。はんなりとやっていきます。はんなりと。

第7話「あれ？」

「説明を要求するわ！」

ビシッ、と俺達に指を突き付け、明日菜は声を大にしてそう言った。説明、ねえ。うーむ。

説明とは当然の如く、先程の宮崎を助けた『アレ』の事を指す訳で。

「え、えつと……」

ネギくんは何故か困り顔でこちらをチラチラと窺ってくる。俺が魔法関係者っぽい事を考慮して、判断を委ねようとしているのかもしれない。

ふむ。

「ズバリ言うが、さっきのアレは魔法だよ神楽坂」

「デイ、デイオ先生ッ!？」

信じられないといった表情のネギくんを無視し、俺は明日菜の反応を窺う。

俺の行ったアレは魔法とは言い難いが、まあいいさ。

目を大きく見開く明日菜を見て、さてどんな台詞が飛び出るかと思っている、

「超能力じゃなかったの!？」

……ああ。

「……だからお前はバカレンジャーのレッドなんだよ」

「なっ！」

流石の一言に尽きる。着眼点が違うというか。

まあ、俺に関して言えば神様から頂いた能力的に超能力者と言えるかもしれないが。

ネギくんはバカレンジャーという単語に一人首を傾げていた。

いや、まあ、そんな事はどうでもいいのだ。

「……魔法使いだろうと超能力者だろうと大した違いはないじゃない

い！」

大有りです。

「っていうか、そんな事よりガキンちょ！」

「はっ、はいい!？」

凄む明日菜に竦み上がるネギくん。その光景は恫喝さながらであった。こりやいかん。しかし明日菜を宥める自信が、俺には無かった。

取り敢えず静観する。

「あんたが魔法使いつて事は、朝のアレ、あんたの仕業ね!？」

明日菜はネギくんの肩を掴み、それはもうガクガクと揺らす。止めてあげて。

朝のアレ、とは何を指す言葉なのか。考えるまでもない、明日菜の服が弾け飛び赤っ恥をかいた例のアレの事である。

原因は勿論ネギくんで、責任も当然ネギくんにあるだろう。今回はくしゃみをきっかけにしたネギくんの軽度な魔力暴走、みたいなそんな感じだと俺は思う。というか、確かそんな感じだった筈。

ただ、親譲りの莫大な魔力を十歳で御し切れというのも無茶な話である。後の修行しまくったネギくんならいざ知らず、というか。それはまだ先の話である訳で。

「す、すすすいませ——!？」

がつくんがつくん、と。ネギくんの頭は既に残像を生み出す程に揺らされていた。

「止める神楽坂。おい、おい神楽坂。神楽坂明日菜さん？」

「すいませんで済む問題かーッ!？」

どうにも俺は明日菜にはスルーされる運命にあるらしい。ちょっと神様に文句の一つでも言ってやろうか。

「ゴ、ゴメンなさい! ああ、その、他の人には内緒にして下さい。バレると僕大変な事に」

「んなの知らないわよ!」

大変な事……ああ、オコジョにされたりするんだっけか。随分と

えげつない行いである。俺は師匠が師匠だし、特にバレるとヤバいという意識は無いけれども。

しかし原作を知っているものだから、たった一人にバレたくらいで慌てふためくネギくんが、随分と滑稽に見える。結局クラスの大半にバレてしまうのにな。

現実是非情なのだ、と手持ちぶさたなので腕組みでもしながら、ぼんやりと考えていると、

「デイ、デイオ先生も何か言って下さいよー！」

「えっ」

えっ。

まさか振られるとは思ってもみなかった俺は驚きを隠せなかったりしちゃったりだったのだが、すぐさまに言葉を返す。臨機応変に対応するのが社会人である。

「……ネギくん。別に理解を得ようとする必要は無いだろう。ほら、こういった場合、魔法使いはどんな行動に出るものだ？」

大人の余裕めいたモノを醸し出しつつ（思い込み）、俺はネギくんに笑い掛けてやる。

さて、こういった状況に於いて魔法使いが取る行動というのは、原作でネギくんが失敗した記憶消去だ。

魔法は秘匿されているモノである為に、一般人に露呈した場合は可及的速やかに魔法に関する記憶を消す必要がある。まあ、改めて説明する必要は無いだろうが。

とにもかくにも、ネギくんは俺の言葉で少なからず落ち着きを取り乱した。そりや来日したその日に魔法がバレりや誰だって慌てるというものだ。

俺はその辺の木にもたれながら、ネギくんの処理を見届ける事にする。十中八九原作通りになるんだろうな、とは思うが。

「うっ、うっ、そうでした。秘密を知られたからには……」

「な、何よ」

「記憶を消させて頂きますッ！」

「はア!？」

杖を掲げ、そう宣言した。

「ちよつとパーになるかもですが、許して下さいね」

「ギャー! ちよつと待ってー!」

ネギくんはムニヤムニヤと何事かを唱え始め、それに伴って杖は宙で回転を、辺りの草木はにわかにはじめ出し、ただならぬ雰囲気醸し出していった。

そういえば、このままだと明日菜は服を消されてしまうのだった。流石に服を消されてあられない生徒の姿をバッチリ拝む訳にはいかない。一応、俺は教師なのだ。

「消えろー!」

「キヤーツ!」

——時よ止まれ!

途端に世界から音が消えた。

ネギくんは杖を明日菜に突き付けたところで固まっている。明日菜は、まあ、驚愕顔だが。

止めていられるのもそう何秒も無い。俺はそそくさとその場から離れ、先程宮崎を助けた辺りまで行った。流石に宮崎はもう居ない。

——そして時は動き出す。

「いやーッ!」

時間停止が終わってすぐに、明日菜の悲鳴が聞こえた。

すまない明日菜、止められなかった俺を許してくれ。……まあ、止めようとしなかった訳だが。寧ろネギくんの記憶消去を後押しした形だった。

それにしても、俺は折角の時間停止をどうでもいい場面で使い過ぎていたような気がする。これでいいのだろうか。

「ん……?」

と、俺は道に転がるコンビニ袋を発見した。中にはジュースが入っている。

「誰のだ、全く」

独りごちながらもその袋を拾い上げ、ふと思う。もうそろそろ戻っても大丈夫だろうか。

今なら明日菜もすっかり体を隠している事だろうし、大丈夫か。

「時よ……いや、別にいいか」

時間停止を多用するのは俺の悪い癖だ。エヴァにも窘められた事もあるし、神様にも指摘された程である。

思えばガキの頃からしょうもない事に使ってきたものであるが、今は置いておくしよう。

「いやあーっ！」

さて戻ろうと踵を返したところで、またも悲鳴が轟いた。どうやら今が丁度修羅場らしい。

俺は緩い歩調で、やかましい生徒の方へと歩いていった。

『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』は人知れず人を救う正義の使者である。

魔法界に於いて最も尊敬される連中らしく、『立派な魔法使い』を目指し日夜修行に励む魔法使いは決して少なくない。ネギくんもその一人である。

「——それで、魔法が人にバレたらどーなんの？」

「か……か、仮免没収の上、連れ戻されちゃいますーっ！　だ……ただ、だから、皆には秘密にー！」

「ほほう……人のために役立つねえ……なーるほどねえ……」

涙ながらに、明日菜は言った。

「という事は私の事の責任も、ちゃんととってくれるんでしょうね？」

「あ……う……」

中学女子（粗暴）の迫力に、さしずめ天才少年も閉口してしまう。そして、明日菜同様涙目で、こちらへ顔を向けてきた。

いや、見られても。

しかし黙り込んだままというのも何なので、俺は開口爽やかにこう告げた。

「生憎だが、ネギくん——此所は私の戦場じゃない」

その台詞で、ネギくんは抗うの止めたよう。責任はとります、と、消え入りそうな声で呟いたのだった。

大丈夫さネギくん、そんなツライモノじゃあない。と思うから。

それからの俺達は、教室に向かい歩を進めた。益体も無い話をしながら。

宮崎を助けた際に使用した瞬動術の事、俺の時止めの事、そういうえばジューズを持っている事（ジューズは明日菜が購入したらしい）……ネギくんからの熱烈な質問から、話は俺の事ばかりになってしまったが、まあいいだろう。

他には魔法使用に関するあれやこれやをネギくんと軽く語ったり。とは言っても口を開いていたのは殆どがネギくんであったが。

明日菜は暇な上に手持ちぶさただったためか、俺からジューズの袋をかつさらっていった。元々あいつの持ち物だから構わんのだが、明日菜が黙っているとは珍しいモノである。

「——あの、それで、ですね……！」

いや、ネギくんの気迫が全てを圧倒しているからかもしれない。

しかし、俺にやたらと話をしてくるのは何故だろう。ネギくんの中で凄い人認定でもされたのだろうか、俺は。

「あー！ もー！」

ビクッ！

ネギくんがまさにそんな感じで明日菜の脈絡の無い叫びに驚いていた。無論俺も驚いていた。

「あんた！ 何か嬉々として話してるけど、責任とるって事は覚えてるんでしょね！」

「え、あ、はい。勿論！」

「だいたい失恋とか不吉な予言ばつかしといて、これで本当に嫌われたらあんたの所為だからね」

タカミチが明日菜を嫌う事は無いと思うが……ま、それは当人には分からない事だよな。

恋人に抱くような好意も期待出来そうに無いのは確かだ。原作では見事に玉砕していた筈であるが、これもやはり当人には分からない事だよな。

現実是非情である。

「責任持つてちゃんと高畑先生との仲を取り持つてよね！」

言いながら、指を突き付ける。

非常に他人任せでよろしくないと、教師として叱る必要があるのだろうが、きっと明日菜には何を言っても無駄であろう事は今日一日だけでも嫌という程理解した。

まあ、まかり間違っても明日菜とタカミチが恋仲になる事はないだろうから、俺は安心して傍観していられるのだが。

決して、明日菜が俺の話に耳を傾けてくれないから諦めている、という訳ではない。決して。

「で、あんた、どーゆー魔法とか使えるのよ」

「えーと、あんまり多くないですが……」

昇降口に差し掛かった辺りで、話題は『どのような手段を以て先程の失態を挽回するか』に変わっていた。

「惚れ薬とかないの!？」

「……ありません、ゴメンナサイ……」

「うつつ……じゃあお金のなる木は!？」

「あの……意味分かんないんですけど……」

何という会話だろうか。ああ恐ろしい。タカミチに好かれるべくお金のなる木を欲する明日菜が末恐ろしい。そんな物があるなら俺が使い……ゲフン。

……まあ、惚れ薬は永続的ではないから飲ませたところでどうしようもないだろうさ。

「先生はどんな魔法使えるのよ。惚れ薬とか持つてる?」

と、どうやら予先が俺に向いたようなので、対処しなければならなかった。

「悪いが私は攻撃的な魔法しか使えない。期待に応える事は出来なさそうだ」

「使えないわね」

明日菜ってこんなズバツと言う子だったわけ?

「……あんたはもう使えそうなのは無いわけ?」

溜め息を吐きながらそんな事を言いやがる。溜め息を吐きたいのは俺とネギくんである事を理解して頂きたいものだ。

ネギくんは苦笑いしながらもしっかりと答えていく。つくづく出来た子だよ。

「他に出来るモノと言えば読心術くらいしか……」

「——それよ!」

たじろぐネギくん。内心『ええー』な俺。しかし明日菜がそれに構う事は無かった。やれやれ。

そうこうしているうちに、俺達は教室のある廊下までやって来ていた。リノリウムの床をカツカツと歩いていく。

「読心術か……それを上手く使って……高畑先生の気持ちを探り出せば……」

明日菜の中で着々と出来上がっていく算段に、俺とネギくんは揃

って苦笑を浮かべた。まったく、困った生徒だよな。

明日菜はガラリと教室の扉を開きながら、

「早速実行よ！ 荷物取ってくるからちよつとそこで――」

――パンパンパーンツ！

明日菜の言葉は複数の破裂音によって遮られた。と、同時に、

「……ようこそ！ ネギ先生ーッ！……」

聞こえた台詞は、新たな担任を歓迎する言葉であった。

俺達は――いや、明日菜とネギくんは、しばし呆然と佇む。やがて明日菜が再起動。俺？ いや、俺知ってたし。原作云々以前に皆から聞かされてたし。

「あ……そーだ、今日あんたの歓迎会するんだっけ……忘れてた！」
忘れんな。

「えーっ！」

教室の中には、我らが2―Aの面々が一同に会していた。

普段と違い縦に並べた長机には、既に様々な菓子やジュースが鎮座していたりして、実に歓迎会といった風情である。

主役の登場によって、この歓迎会場は爆発的に騒々しくなった。

「ほらほら、主役は真ん中」

「わぁー、嬉しいなあ」

皆に連れて行かれたネギくんを見届け、俺は一息ついた。やれやれ。原作の出来事を少し体験しただけで疲労感が酷い。

わーきゃー騒ぐ生徒達を横目に、俺はその辺の椅子に腰掛ける。

「飲むか？」

そんな俺に、スツと紙コップが差し出された。声の主は、

「エヴァ」

「ふっ、随分と疲れているじゃあないか」

紙コップ片手に微笑を湛え、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは俺の隣に座った。

「いたのか」

「おい、何だその言い草は」

「お前はとつくに帰っているものだと思っていたが」

「奴の息子が来たんだ、歓迎するのは当然だろう？」

「……そうだな」

恐らく、此処の連中とエヴァとでは『歓迎』の意味合いが異なっているだろうが、俺は下手に突っ込まずにエヴァの手から紙コップを受け取る。藪蛇はゴメンだ。

くい、とコップを傾け、中に注がれたジュースを飲み干す。妙に甘ったるい……一体何だこのジュースは。

「学園限定ジュース、だそうだ」

そいつはグレートっスね。

「茶々丸、私にも一杯寄越せ」

「了解しましたマスター」

エヴァの一声に反応があった。無論だが俺ではない。後ろに控えていたらしい茶々丸が声を返したのだ。

絡繰 茶々丸。ウチのクラスの生徒であると同時に、エヴァとドール契約を結んでいる、エヴァの従者だ。

特徴はロボットである事、だろうか。科学と魔法の結晶らしいが、まあ、俺の理解が到底及ばないだろうという事は確かである。

俺がエヴァと師弟関係なので、茶々丸とは当然のように知り合い（クラスを受け持つ前から）ではあるのだが、思えばろくに接した事は無い。

……無理して関わる必要は無いか。茶々丸は後々ネギくんがどうのこつをするだろうし。

「マズッ」

エヴァは茶々丸に注いで貰った学園限定ジュースとやらについて、簡潔に一言呟いた。苦虫を噛み潰したかのような表情で、

「甘ったるいにも程がある。何が学園限定ジュースだ、ふざけてるのか」

そう言っ、机の上でコップを自分の手が届かない場所まで滑らせた。勢い余って床に落下しそうになっ、たが、安心安定の茶々丸さ

んが見事にキヤッチなされた。うん、流石。

「なあ、エヴァ」

「何だ、馬鹿弟子」

「決るぞ。そんな事より、お前随分まったりしているな」

「殺るぞ。ふん、まあ、偶にはこういったモノもいいだろう」

「ほう」

何と言うか……、

「何を企んでいる？」

「……………」

すつ、と。エヴァの目が細められる。その目は外見に全くそぐわず、エヴァが何百という年月を生き抜いた吸血鬼である事を表していた。

まあ、そんなエヴァはとっくに見飽きてしまっているのだが。

エヴァが口を開く。

「分かるか」

「お前の弟子だからな」

「ふんっ」

鼻を鳴らして腕を組み、不遜な態度を取るエヴァ。しかしその姿は、出会った当初よりも幾分丸くなっているように思えた。

「その企み、弟子のお前には話しておこうと思ってな」

いかにも嫌だという感じのする笑みを浮かべ、エヴァは席を立った。移動しようとしているらしい。お前も立て、と目が語っていた。

ああ、藪蛇だったか。まあ、いい。

エヴァ自身も企みと称した考えだ、タカミチ等に気付かれては面倒なのだろう。俺は素直に席を立ち、エヴァと茶々丸と共に教室を後にした。

大いに盛り上がっているネギくん達を尻目に。

第7話「あれ？」（後書き）

はんなりとやった結果がこれだよ！

神様の代わりにエヴァさんが登場した回でした。

神様『神は言っている……私の出番を増やさないと……』

第8話「時の流れを垣間見る」(前書き)

今回短め。今まで通り適当に詰め込んでます。

第8話「時の流れを垣間見る」

「私は呪いを掛けられている」

歓迎会から抜け出した俺達は、誰にも干渉されない場所を求めて少し彷徨き、結局エヴァの家に行って来ていた。教室を出る際には何やらクラスの連中にやんやと騒がれたが、そんなモノは振り切り。思えば久しぶりに足を踏み入れるエヴァハウスだったが、相変わらず雑多な家だ。人形もあれば十字架もあり——チャチャゼ口まで転がっていた——悪く言えば散らかっている。

まあ、エヴァに言わせれば散らかっていないのかもしれないが。はてさて。

そうやって気兼ねなく話せるエヴァハウスにやって来て、エヴァが第一声として放ったのが冒頭のアレである。

エヴァが呪いを掛けられている事を俺は原作を読んでいたの当然知り得ている。が、以前にエヴァ自身からも聞かされた事があるのだ。

今更何を、と俺が思った矢先。

「だが、あのぼーやが来た事で、この忌まわしい呪いが解けるやもしれん」

俺はピンと来た。『ああ、アレか』と。『あの話か』と。

「……確か、登校地獄、だったか」

エヴァは無言で頷いた。

この吸血鬼さんは十数年前、ネギくんの父親であるナギ・スプリングフィールドに登校地獄の呪いを掛けられ、この麻帆良学園に封印されてしまっているのだ。この呪いが解けない限り、エヴァが学園外に出る事は出来ない。

それだけではなく、エヴァは魔力まで封じられている為、最強種である吸血鬼の真祖の力を遺憾無く発揮出来ないのだ。

いやはや、地味なようでえげつない呪いだよ、こいつは。

問題なのは、この呪いがやたらと力任せに掛けられているという事。ナギ・スプリングフィールドは強大な魔力を有していて、その魔力をふんだんに使って呪いを掛けてしまったものだから、解呪しようにも出来ないのだ。

実に厄介である。

「このバカげた呪い……こいつを解くには、ナギ・スプリングフィールドの血縁たるあの子供先生の血が必要だ。大量にな」
「成る程」

原作通りとはいえ、ネギくん、君は実に不憫だな。つくづくそう思うよ。

「デイオ、気付いているか？ あの子供先生が秘めた馬鹿馬鹿しいまでの魔力量に。奴の血縁者で、しかもあれだけの魔力だ、ほぼ間違いない封印は解けるだろうさ」

ネギくんの魔力量と、その凄まじさ。それは原作知識として持ち得てはいる。いやしかし、それは所詮『知識』に過ぎず、実感を伴っていないかった。

だが、エヴァに魔法を習い、魔力というモノを理解して、現にネギくんと相対すると肌で感じる。あの幼い少年のポテンシャルを。異様なまでの魔力を。

それを思えば、あれほどの魔力を有し、且つナギ・スプリングフィールドの血縁者であるネギくんの血を吸えば、如何にデタラメな魔力で力任せに行われた封印であっても解けるかもしれないかった。

「しかしエヴァ、その馬鹿馬鹿しい程の魔力を持つネギくんに、封印状態のお前で勝てるのか？」

この問いに、エヴァはふっと一笑した。

「なあ、我が弟子よ。あまり師匠をナメるなよ？」

流石に何百という年月を生きた合法口りは滲ませる自信から格が違う。

「確かに封印状態にある私では、比類無き魔力を有する奴の息子には、下手を打つと負けてしまうかもしれん」

敗北を示唆するその言葉に、しかしエヴァはくつくつと笑った。

まあ、そんな事はある得んがな、と前置き、

「だが、そうさせない為の下準備は、既に初めている」

「……………」

俺は黙して語らなかった。エヴァの言う下準備、そいつに見当は付いていたから、敢えて何も口にしなかったのだ。

最近、麻帆良で存在感を増してきた噂がある。

——桜通りの吸血鬼。

それは、満月の夜になると女子寮の桜並木に出没するという、血塗れの吸血鬼の噂だ。

満月の夜、呑気に桜通りを歩く女生徒は、その生き血を吸われるらしい。

ぶっちゃけ噂の真相は、ガチ吸血鬼のエヴァさんがちゅーちゅー吸っていた、って感じだが。

下準備とは恐らくこの吸血行為の事なのだ。封印状態のエヴァは吸血鬼らしく血を吸う事で、微量ながら力を蓄えているのだろう。

黙りこくってしまった俺に、エヴァは不満気な表情で、

「その様子だと勘付いているようだが……まさかお前、『吸血を止める』などとは言わないよな？」

「まさか」

即答であった。

エヴァが死ぬ程血を吸うのであれば、まあ流石に止めるだろうが、そうでないなら構う事はないだろう。

大体にして、これはネギくんが解決すべき事案だ。俺は呼びではないのである。

「ふ、ふふ……即答か。いや、流石、仮にも私の弟子だ」

にやり、と、すぐさま表情を変えるエヴァ。悪どい笑みだ、流石に悪の魔法使いである。

「……………」

まさかそれを話す為だけに俺を連れ出した訳ではないだろう。

「察しの良いお前なら、私の用件にも気付いているのではないか？」
「さっぱりだ」

俺は大仰に肩を竦めてみせる。それを見て、ふん、とエヴァが鼻を鳴らした。

「なら単刀直入に言ってやろうか。……ディオよ、私の為に働け」
それはつまり、ネギくんの血を吸う為に協力しろ、という事に他ならない。

「万全を期す。弟子のお前を使つてでも、あのぼーやの血を吸う」
エヴァの眼は決意で満ちていた。

普段のエヴァならば、例え弟子である俺にさえ協力を求めたりはしない筈だ。きっと従者の茶々丸と二人で何とかしようとするだろうし、そもそも原作では二人で事を行っている。

そんなエヴァが、だ。そんな師匠が、だ。俺という手駒を揃える事を『万全を期す』事だと、そう言っているのだ。

それは純粹に嬉しいし、弟子にして貰った恩もある。だったら――
―応じない訳にはいかないと、そう思った。

「了解した、師匠」

「……ふん、当然だろうが、馬鹿弟子」

ディオ・ブランドーが、一時的にネギくんの敵に回る事が決定した瞬間であった。いや、スマンな、ネギくん。

『「キング・クリムゾン」の能力では、この世の時間は消し飛び……そして全ての人間は、この時間の中で動いた足音を覚えていないッ！ 空の雲は、ちぎれ飛んだ事に気づかず！ ……消えた炎は、消えた瞬間を炎自身さえも認識しない！ 「結果」だけだ！！ この世には「結果」だけ残る！！』

「つまり……何が言いたいんだ？」

神様の唐突な台詞に、俺は素直に疑問符を飛ばした。未だに敬称を付けているのは敬っている訳ではない、ただの惰性だ。

この神様、時間を追う毎に突飛な発言をする奇特なキャラに変貌していつているが、そんなのに脈絡も無く絡まれる俺って心底可哀想。

エヴァとの会合も歓迎会も終わり、陽はとつぷりと暮れ、けれども教師として書類の整理やプリントの作成なんかを行っていた、そんな折りであった。先程の発言が頭に響いたのは。

『要約しますと、なんか思ってたよりもツマラナイから、面白そうなところまで早送ろうかな、って事です』

えげつない、流石神様えげつない。

人の人生を結構あっさりと『ツマラナイ』認定してくれやがった。そんな烙印押すなよ、物語的にはこれからだろ。

「その旨を伝える為だけに、わざわざ念話してきたのか。どこまでも暇な奴め」

『いやいや、流石にそんな事はありません、ちゃんと本題がありますよ。……ところで』

「なんだ？」

『そのよく分からない小芝居は、私に対しても続けるつもりですか？』

小芝居……とは。

「ふむ、一体何の事やら」

『それですよそれ』

ん？

イマイチよく分かん。

『何でもノローグと台詞で口調を使い分けてるんですか』

「何を言っているんだ」

『素ですか……成る程……』

何やら納得しているようだが、こちらとしてはまず説明して頂きたいな。

『横道に逸れてしまいました。本題に入りましょう』

最初からそうしてくれ。

『えー、以前に天使の事を少しだけお話ししましたよね？』

「天使……？」

以前、というのは、一体何年前の事なのだろうか。俺は懸命に記憶を遡った。

「ああ……」

と、俺は思い出した。そう、それはそもそもの発端。俺の転生を決定付けた理由と言っても相違ない。

転生前に聞いた、働き過ぎの天使の話だ。働き盛りなのか知らないが、神様のこなす仕事まで片付けてしまっている、優秀な厄介者達。

おかげで二度目の人生を歩む事が出来たと思えば、天使達のワーカホリックぶりは、俺にとってはまさしく天使のような行いであるが。

『どうやら思い出せたようですね』

「また天使が何かやらかしたのか」

『ええ……まあ、そうです』

肯定されてしまった。

『端的に話していきます。貴方から見て未来の出来事です、そこ、麻帆良の地に二人の天使が現れます』

「ほう」

明らかにイレギュラーだな。俺と同じ……いや、天使の方が転生者よりもイレギュラー感が強いように感じる。

「流石に神だな、未来の出来事まで分かっているのか。で？ その天使達が、地上で何かやらかすのか？」

まさか天使を倒せ、などと無茶は言わないだろうな。と、内心戦々恐々としていたのだが、

『いえいえ、まさか。私がお願いするのはそんな物騒な事ではなく、もっと平和的な事ですよ』

平和的、ねえ。

『やって来た天使達と、仲良くしてあげて下さい。それが今回の本題です』

神様のお言葉は、存外に優しいものだった。

第8話「時の流れを垣間見る」（後書き）

天使がどーのこーのは、赤原 鴉の赤原の方が執筆中の『魔法先生ネギま！ ～天使で死神な物語～』をご覧頂くと、より一層理解が深まる可能性があります。

きつとね。

第9話「去来するパラッチ」

——カチッ。

——ディオ・ブランドー先生をどう思いますか？

「ディオ先生？」

「あー、カッコいいよね」

「後何だろ、クール？」

「何かあっても取り乱さない感じ」

「筋肉いいよ筋肉」

「でも何となくさ、近寄り難いよねえ」

「だねえ。あんまり誰かと仲が良いつて感じでもなさそうだし」

——生徒とは距離があると感じる訳ですか？

「んー、そうなるのかな」

「寡黙って訳じゃなくて、普通に話してはくれるんだけど……ねえ？」

「うん、何て言うか、一定の距離までしか近付かない、みたいな」

「親しくはなれないと思う」

「僧坊筋ハアハア」

「ちよつとアンタ黙りな」

——分かりました。付き合って頂きありがとうございました。

「はいはい」

「このくらいお安い御用さ」

「パラッチは大変だねえ」

「腹筋パネエ」

「おいこら戻ってきな」

—— キュルキュルキュル。

「ふーむ」

テーブルコーダーを手に、朝倉 和美は一人夕暮れの世界樹前広場、その階段に腰掛けていた。

録音された取材内容を二、三聞き直し、もう一度唸る。ふーむ。

「やっぱ近寄り難いつてのがあったなー」

今日だけで何人にも同じ事を訊いて回ったが、返ってきた言葉はどれも同じ。

それは和美がディオ・ブランドーに感じている事でもあったから、それ事態は特に疑問に思いはしなかった。

が。しかしである。

和美はつい先日の歓迎会を思い返す。皆がそれぞれ騒ぎ倒してい

る、賑やかな会場。けれど、そこを抜け出そうとする不屈き者の姿を多くのクラスメートが目撃している。

抜け出した人数は三人。

エヴァンジェリン、茶々丸、そしてディオ。

何故彼らが歓迎会を抜け出したのかは和美が知る由も無い。いや、知る必要は無いのだ。問題は『抜け出したという事実』にある。

和美は先程再生した取材内容を再三思い返す。そうして、単純に今持ち得る情報を並べた。

- ・ディオ・ブランドーは近寄り難い
- ・歓迎会を抜け出した三人
- ・わざわざ歓迎会を抜け出した彼ら

近寄り難いと言われているディオ・ブランドーと一緒に何故か歓迎会を抜け出した二人の生徒。

和美はこれが気になった。

いや、教師と生徒が一緒にいるのは、何も不思議な事ではない。勉強について訊いていたりする場合だってあるだろう。だが歓迎会の最中だ、その可能性は無いと思われた。

そう言えば会場から去ろうとする前には、ディオとエヴァは割りとは親しげな雰囲気醸し出しつつ会話していたように思う。茶々丸は使用人のように脇に控えていただけだったが。

——何かがある。

教師と生徒の淫行疑惑？ 不純異性交遊？ それとも、もっと別の——大スクープと言えるような何かか？

まあいい。それは調べていけば分かる事なのだ。和美は頷きながら立ち上がった。

「3」A公式カメラマンとして、クラスに関する疑惑は徹底追究し

なくちゃね」

ニヤリとほくそ笑み、和美は駆け出した。話を聞きたい人物がまだいるのだ。

パパラッチは忙しく動き回る。

教員には教員専用の寮があつたりする。そこは多くの独り身教員が住まう、言わば独身寮だ。当然だが、俺もその寮の一角で暮らしている。

教師として働く前は一時期エヴァの家で過ごした事もあつたが、今となつては流石に厄介にはなれない。一応、教師と生徒だぜ？ いつパパラッチに激写されるか分からん。

まあ、そんな訳で。

今日も耳を劈く勢いで鳴る目覚まし時計に起こされて、一日が始まるのである。時刻は朝の五時。学生時代ならまだ爆睡しているところだが、今はそうはいかない。生徒達よりも早めに登校しなければならぬのだ。

俺は爆音凄まじい目覚まし時計を止める。

ああ、エヴァの家にいた頃は、チャチャゼロが優しく起こしてく

れたのになあ。……いや待て、アレは本当に優しかったのか？ ……ま、まあいい。

突如として脳裏をよぎったナイフのイメージを振り払い、洗面所にて洗顔する。

と、その時。

——ピンポーン。

インターホンが鳴った。

一体誰だ、こんな朝っぱらに。

心当たりは無かった。特別親しい同僚なんてタカミチくらいしかないし、訪ねてくる人は皆無の筈だ。……我ながら寂しい人生である。

だからこそ疑問に思う訳だが……まあ、そんな事を思う暇に玄関扉の覗き窓から外を窺った方が早い。

——ピンポーン。

またもインターホンは来客を知らせた。急かさないで貰いたいものだ。

俺はそつと覗き窓を覗く。想像出来る客人は、エヴァに茶々丸、タカミチやネギくん、後は魔法繋がりの知り合い。

さあて、誰が来たのかな。

……………。

「なん……だと……」

思わず呟いてしまう程に、それは衝撃的であった。例えるならば『魔法を目撃した時の明日菜』のような顔を、俺は今しているだろう。

俺が覗き窓から垣間見たモノは、カメラを首にぶら下げ、テープレコーダーを片手に制服姿で佇む、麻帆良のパパタッチだった。

俺は反射的に、無駄な程俊敏な動きで扉から離れた。

なんだアレ。

いや、分かっている、アレがウチのクラスの新聞記者である事は。アレが朝倉 和美だという事は。

分かっているから恐ろしい。考えてもみる、朝っぱらに、わざわざ、パパラッチが訪ねて来たんだぞ。……何かあるのではと疑うの致し方あるまい。

普通ならばパパラッチの異名を持つ生徒であつても警戒に働かないだろう。中学生のパパラッチなどたかが知れているのだから。

しかし、奴は本物だ。

ただでさえ異様な連中が多い麻帆良に於いて、朝倉は『非常に高い』では済まされない程、情報収集能力に長けている。

そんな奴がだ、わざわざ朝っぱらに訪ねて来て、カメラはともかくテープレコーダーを握っていたら……無闇に扉を開ける事はしないだろう？ 俺だつてそうする誰だつてそうする。

何度だつて言おう。ああ恐ろしい。

いや……だが。

思えばスクープされる事柄なんて俺には魔法関連しかない。色恋沙汰は無縁であるし、他に後ろめたい事もありはしない。まさか魔法関連のネタを握られているとは到底思えないし。

クソ、こうしていても埒が明かない。意を決して扉を開くか。仮にこの場をやり過ぎせたとしても、結局は学校で顔を合わせる羽目になつてしまうのだ。

——ピンポーン。

ああ、早く出ると催促のチャイムが鳴らされた。分かった、出るよ。

——ピンポーン。

五月蠅いぞ、出るつての。

——ピンポーン。

いや、だから、

——ピンポピポピポピンポーン。

「やかましいッ！」

俺は扉の耐久性を微塵も考慮せずに扉を開いた。どがしゃーん、と、してはいけなような音が辺りに響く。

「あ、出た出た。おはよーございまーす」

そんな凄まじい扉の開け方をいとも容易くスルーして、朝倉は営業スマイルさながらな良い笑顔を浮かべた。……エヴァの不敵な笑みよりよっぽどマシか。

俺はエヴァの嫌らしい笑みを頭の中から振り払い、改めて朝倉の方を見る。

「一体どうした？ 何の用だ？」

「突然訪ねてすみません、先生。まあ、大した用じゃあないんですけど……」

果たして、大した用でもないのにこんな朝早くに来る奴がいるだろうか。

「単刀直入にお尋ねしますね」

「む……ああ」

朝倉はもう少しフレンドリーな奴だと思っていたのだが、どうにも口調が堅い。まさか俺に対し緊張している訳はないだろうが。

俺の返事に朝倉は、ほんの一瞬だったがニヤリと笑った。……ん？

「ウチのクラスのエヴァンジェリンさんとは、一体どういうご関係なんですかあ？」

「……………」

え？

「……何だって？」

「ですからあ、エヴァンジェリンさんとはどういうご関係？」

ぐはあ。

やはり聞き間違いではなかった。ガチだこれ。『現実是非情である』でお馴染みの現実さんだった。

なんだ、何か握ってやがるのか？ 俺は激写されてしまったのか？

『いつパパラッチに激写されるか分からん』なんて思ってた矢先にこれかよ。現実是非情である。

朝倉がどういふ情報を仕入れているのかが分からない以上、妙に

テンパって珍回答をする訳にはいかない。俺は至って冷静に答えた。

「訊かれてもな……教師と生徒だが」

「ほっほう、あくまで白を切る、と」

「何だと？」

何を言うんだ、こいつは。

「ふつ、調べはついてるんですよディオ先生！ 先生とエヴァちゃんの実はッ！」

「実は？」

「『家族同然の仲』という事はねえ！」

……おや？

「何処情報だ、それ」

「茶々丸ですよ、絡繰 茶々丸。彼女の証言です」

何言ってくれてんだ、あの口ボ。

俺は頭を掻いて嘆息する。何だ、てつきりもつとヤバい事かと思つていたのに……何て事はなかったな。

「まあ、間違いではない、とだけ言っておこうか」

「随分あっさり認めるんですね」

「真実ではないからな」

飄々とした態度で受け答える。此処までくるとパパラッチも恐くない。恐るるに足らず。

——カチッ。

と、朝倉はテープレコーダーのボタンを押した。何だ、今頃録音か？

「貴重な証言、ありがとうございました、先生」

違うな、録音し終えたのか。抜かりないな。

その後、朝倉は、『次の麻帆良新聞を楽しみにしている』という旨の言葉を告げ、足早に寮から去っていった。

ふむ。びくびくしていた数分前が嘘のようだ。胸中晴れやかである。

「さて……準備するか」

突然の来訪には心底驚いたが、ま、お陰で目が冴えた。そこだけ
は感謝する事にしよう。

取り敢えず、俺はのそのそと洗面所を目指したのだった。

「おいディオツ！ 一体何だアレはッ！」

翌日の事。俺が教室に向かうと、エヴァが怒り心頭といった様子
で噛み付いてきた。

アレ……？ 何だそれは。

「くっ、いいから来いッ！」

力任せにエヴァに引っ張られる。おいおい、何だ何だ。

わたわた着いていくと、生徒達が掲示板を囲うようにして立っ
ているのが目に入った。

「おい、何をしているんだお前達。もうすぐ鐘が鳴る、さっさと自
分の教室に戻れ」

生徒の群れに教師らしく注意するが、生徒達はこちらを見遣ると
隣近所とボソボソ話し始めた。

突き刺さる奇異の視線。……何故だ？

エヴァはそんな生徒にお構い無しに、俺を引っ張って掲示板まで

一直線に向かう。

「これを見るッ！」

ドンッ！ と力強く掲示板を叩くエヴァ。そこには一枚の新聞が。
「見る、と？」

「そう言っているッ！」

眼光鋭くそう言うエヴァに、俺は肩を竦める。これは手に負えない。大人しく新聞に目を通そうじゃないか。

俺は視線を新聞に移し、デカデカと書かれた見出しを見る。見て……俺は固まった。記事の内容は、俺とエヴァの事だったのだ。詳細は概ね以下の通りである。

『家族同然に親密な関係であると、ディオ・ブランドー教諭は語る』

『記者が二人の関係について尋ねると、同氏は実に飄々とした様子で前述した関係であると口にしたのだ』

『その様子と、語る関係から鑑みるに、二人は随分と以前から付き合っていたようだ』

『今は憶測に過ぎないが、記者はこれからも二人の事を掘り下げていくつもりである』

『文責・朝倉 和美』

「家族同然って……」

「教師と生徒、禁断の……？」

「これヤバいんじゃないの？」

周りの生徒達の眩きが耳に入った。あ……れ？ どうしてこんな
った。

「お、お前……何を勝手に恥ずかしい事を言っているんだ……！」
怒りに肩を震わせるエヴァを尻目に、俺は軽率な言動を割りと本
気で悔やんでいた。

そうだ、俺はエヴァとの関係を家族同然と言っても何もおかしい
とは感じないが、周りはそうではないに決まっているのだ。

あー、俺ってもしかして……、

「トチった、か……」

——当然だが、俺はこの後に様々な人に問い詰められる羽目とな
ったのだった。

第9話「去来するパラッチ」（後書き）

チャチャゼロ式起床方法は『別荘』限定となりますので、皆様ご注意下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1977r/>

魔法先生ネギま！ ～転生者の奇妙な物語～

2011年11月30日23時52分発行